
いとし

wabi-sabi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いとこひ

【Nコード】

N70440

【作者名】

w a b i - s a b i

【あらすじ】

壱菜は母の教育方針、『男女七歳にして席を同じうせず』を現在進行形で実行中の17歳。女子校育ちの影響もあって、年齢〃彼氏いない暦だ。そんな彼女の特技は老人と子供を除いた男の人に触ると静電気を発する事？そんな彼女の目標は好きな男の人と手をつなぐ事！ある日ついに巡り会った、壱菜に触れても静電気を浴びない奇跡の少年、セナ。『運命の王子様』と浮き立つ壱菜。ところがお騒がせな祖母の登場により、壱菜は運命の赤い糸はたぐり寄せるところか絡まりまくりの混線状態に！（年齢制限のつく回はサブタイ

トルに を着ける予定です。序盤はほとんど健全です！)

杏菜十七歳にして静電気を同じつせず（前書き）

なろっさんには初投稿です。よろしく願います。

壹菜十七歳にして静電気を同じうせず

『男女七歳にして席を同じうせず』

私、あらたにいちな荒谷壹菜が物心ついた頃から繰り返し聞かされて来た、絶対厳守の掟。ルール

えっ、この話の舞台設定は昭和初期かって？

答えは「NO」。

ママは昭和生まれだけど、私は平成生まれ。

週休二日制が当たり前のゆとり世代です。

うちはいわゆる母子家庭というやつで、婿養子だった私のパパは私が物心つく前に家を出て行ってしまった。

原因はパパが他所の女の人を好きになってしまったから。よくある話よね。

私は写真以外でパパの顔を知らないし、パパの声すら知らない。

パパがいなくなって以来、うちのママは極度の男嫌い。

おじいちゃんが言うには、ママは元々男性不信の気があって、本人も恋愛とかそういうものに傾倒するタイプの人間じゃなかっただけに、元々幼なじみ同士で信頼関係が築けていたはずのパパの裏切りがショックだったみたい。

私知ってるだけでも何回か再婚の話があっただけど、ママはそれを全部断っている。

だからといって、ママの貞操観念を私に押し付ける事ないと思わない？

私を通った幼稚園はご近所にあるごくごく普通の幼稚園だったけど、今思えば年少さんから年長さんまでの三年間が一番恵まれた三

年間だったのかも。

だってごくごく普通に同じ世代の男の子が周りにいて、一緒に遊んだり、お昼寝したり、手をつないだりしてたんだよ。

今はどうかって？

ママの教育方針で6歳児だった私は有無も言わされずお受験戦争に参加した。

そんなにIQが高い訳でも目立った才能があつた訳でもなく、どっちかっていうとどんくさくてのんびりやだった私。

けど画家だったおじいちゃんのネームバリューも働いてか、運良くお受験戦争の勝者となった私が小学校から籍を置いている私立十六夜学園はこの辺ではお嬢様学校と呼ばれる名門女子校だったりする。小等部は右を見ても左も見ても女子児童のみ。

そのままエスカレーターで中等部（やっぱり女子のみ）。

今現在は高等部（当然女子のみ）。

で、順当に行けば来年には十六夜学園の大学もしくは短大（言うまでもなく女子のみ）に進学予定。

いくら女子校育ちって言ってもこの世の半分は男でなりたってるわけ、私だって『男女交際』おつきあいというものに興味がある。

けど、興味はあっても行動に移せない。

それには深いワケがあつて…。

「堇菜。こっちこっち」

いつものバスに乗り込んだ私が空席を探していると、栗色の髪の毛をゆるいお団子にまとめた女の子が私に声をかけて来た。

「おはよ、堇菜」

「おはよう。きりちゃん」

彼女、きりちゃんこと田所霧霞たどころきりかが着ているのは私と同じ紺のセーラー服。

襟には二本の赤いラインが入っており、赤いリボンと茶色い革の学

生靴の一部には『十六夜』の月の名前とはさっぱり関係の無い『鐘』をモチーフにした校章が入っている。黒いタイツと茶色のローファ
ーも当然私と一緒に。

だって同じ学校ですから。

きりちゃんと私は十六夜学園中等部時代からの友達だ。

うちの校則はカラーリングもパーマも禁止。なのにきりちゃんの栗毛がOKなのは彼女の髪はカラーじゃなくて地毛だから。

名前こそめっちゃ和名だけど、きりちゃんにはおフランスの血が混じってる。

「珍しいね、きりちゃんがこのバスに乗ってるなんて」

「うん、今日委員会の当番があつて。真面目っ子の壺菜は毎朝こんな早いバスに乗ってるの？信じらんない」

確かに私の乗ってるバスは十六夜学園の生徒が乗るにしては少し早い。

多分もう2、3本後の便でも余裕で学校に着くはずだ。

私だって朝は眠いし、5分でも10分でも長く寝てたいんだけど、毎朝6時に起こされて7時過ぎには家を追い出されてしまうのだからしょうがない。

「真面目っ子はやめてよ」。私はうちを追い出されるのが早いだけ。それにしてもきりちゃん久しぶり」

「S組だけ階が違ふもんね。壺菜ってB組よね。裕理とかいるみが一緒だっけ？」

「裕理とまゆりは一緒だけど、いるみは確かD組だよ」

「あれ、そだっけ？まあ双子はどうでもいいんだけど」

今名が出た木島裕理きしまゆうりはきりちゃん同様、中等部からのお友達。

木崎まゆりというみは双子の姉妹。彼女達も中等部からの友達なんだけど、きりちゃんは双子の区別がつかないみたい（とはいえ、私も区別できる様になったのは高等部に上がってからだけだ）。

「S組はどう？先生厳しかったり、宿題多かったりするの？」

「え、普通だよ。別にS組の人間がみんなレンみたいに難関校受け

る訳じゃないし」

「そういえばレンとも最近会ってないかも」

「ああ、レンね。あの子な〜んか最近秘密主義なのよね。成績は上位キープしてるけどな〜んかどつかおかしいの。そのうち暴いてやる！」

高等部三年にだけ存在するS組は、十六夜学園の内部進学を希望せず、外部の大学受験を希望する生徒の為の特別進学クラスだ。

きりちゃんれんは留学希望で、私とは小等部からの友達、レンこと富岡とみおか恋は天竜大志望みたい。

内部進学組の私と比べて、大学進学の時点で将来の目標を持つてる二人はなんだか大人に見える。

県立浮草東高校前のバス停で数人の乗客を降ろしたバス。

日によつてはこの辺りで席に座れるんだけど、今日は無理みたい。

「東高前、降車の方いませんか？」

車掌さんのアナウンスで一人の高校生っぽい男の子が慌てて席から立ち上がった。寝過ごしてたのかな？

「すみません、降ります」

込み合つた車内の人をかきわけ、わたわたと降車口に向かっている。私は通路をあけようと一步シート側に寄つただけど、人ごみに足をとられた男の子が体勢を崩して思いつきり私の肩に手をついた。

（あつ、これはやばいかも…）そう思つたのと同時に、

バチバチッ！

音にするとまさにそんな感じ。冬場にセーターを脱いだ時の静電気のポリウムを×100つてところかな。

男の子は即座に私の肩から手を離れたけど、痛そうに顔を歪めている。

「いって〜、なんだよ、今の？」

ぶつぶつ言いながら私を睨んでたけど、ここは通勤通学客のごった返すバスの中。

結局それ以上何も言わずに急いでバスを降りて行った。
つんつん。

きりちゃんが私の腕をつついた。

「ちよつとき菜、今の子相当痛そうだったわよ」

「う、うん…。だつて急だったからびっくりして」

「バチバチつて派手な音してたわよ。あと青白く火花も見えたよ
うな…」

「そ、そうかな？」

「久々に見たけど、なんだか威力アップしてない？あんたの電気攻撃。そろそろピカ ユウとはれるかも」

「攻撃してるつもりはないんだけど…」

「早く治しなさいよ、その静電気体質。じゃにといつまでたつても
カレシなんてできないわよ？」

きりちゃんがはあつと大きなため息をついた。

「十六夜学園前」、十六夜学園前」

バスから降りればそこは同じ制服を着た女生徒ばかりが目につく通
学路。

十六夜学園は小等部から高等部まで同じデザインの制服で、違つのは
足下だけ。

小等部は白のソックス、中等部は紺のハイソックス。高等部は黒の
タイツかストッキング。

小等部は門の方角が別なので、時間带的に今は高等部の生徒よりハ
イソックスを履いた中等部の生徒が多い。

バス車内で始まったきりちゃんのお説教はまだ続いていた。

「だいたいき菜はね、男の人を恐れ過ぎなの。もっと自分から飛び
込んでいかなきゃ。そんなんだからその放電体質が治ないのよ？」

「そんなの無理だよ。きりちゃんも知ってるでしょ、うちのママ本
気で恐いんだよ。副担任が男の先生だつただけで学校に怒鳴り込む
人なんだよ？」

「ほら、またママのせいにして。そもそもなんで中学の頃は蕁麻疹だったのに、高校入ったら静電気に進化するわけ？」

「そんなのわかんないよ」。けど、蕁麻疹はぶつぶつだしかゆいしやけど、静電気ならこっちはそんなに痛くないし、楽かなって思ってた」

「いーちーな」。あんたの電気攻撃はあんたは痛くないみたいだけど、相手はかなり痛いよ。そんなんじゃあんた一生処女よ？一生TVの中のアイドルにだけ恋して純潔を守るつもり？ヤバいわよ、それ」

「しょ、処女ってそんな大きな声で言わなくても」

私達の会話を聞いたのか、中等部の子達の視線が痛い。

うちの学校は男女交際禁止ってわけじゃないから、高等部ともなると彼氏持ちの子が増えるけど、中等部だと私みたいに彼氏いない暦〃年齢って子が多いんだから。

『男女七歳にして席を同じうせず』

ママの言いつけを頑なに守って来た私は思い返せば男の人とまともに喋った記憶がほとんどない。

小等部の頃からバスとか電車とか、公共の交通機関はしょうがないとして、図書館でも病院でも男の人が出入りするような場所に行く場合は事前にママに申告。

中等部に上がった頃には、カラオケとかかプールとか、映画館すら禁止令が出る様になった。

理由は不特定多数の男の人の目に曝されるから。

高等部にあがると、時々合コンとかパーティのお誘いが来るようになったけど、そういうのはママに相談するまでもなくに自分で断るようになっている。

だってママにバレた後の事を考えると色々面倒だしね。

そんな私は中等部に上がった頃からか、子供とかお年寄りを除いたいかにも『男』って感じの人と接触すると蕁麻疹が出るようになって

た。

それは先生だろうが、お医者さんだろうが、近所のおじさんだろうが、友達のカレシであろうが、見知らぬ人であろうが、皆同じで。

「精神的なものでしょう。今は多感な年頃ですし、しばらく様子を見てみては？」

あのとときそう診断した医者、ちよつと出て来なさい。

しばらくつてどれ位？多感な年頃つて何歳まで？

ここ1、2年、確かに男の人に触つても蕁麻疹は出ていない。

けど……、もーつと重篤な弊害が出る様になつてしまったのだ。

「ちよつと聞いているの、**壱菜**。高校卒業前に絶対この体質治すからね。男に触ると静電気が出るなんてなんのギャグ漫画よ。時代遅れよ！ナンセンスよ！」

「治したいけど、治るかな？」

「今日から早速訓練よ！特訓よ！裕理に頼んで**瑛明**の子とコンパよ！」

「え、いきなり今日は無理なんじゃ……。てかきりちゃん彼氏は？」

「あー、あいつね。煮え切らないから今放置中。じゃあ**壱菜**、放課後迎えに行くからね。逃げちゃ駄目よ！」

きりちゃんはさつさとS組の下駄箱方向に去つて行く。

「え、きりちゃん……」

拒否しきれなかった私は、裕理の今彼、瑛明高校の悟君がコンパのメンバーを集めきれないことを祈るばかり。

えつ、早くも逃げ腰？うーん、否定できません。

荒谷**壱菜**、17歳、高三。

特技、『男の人に触ると静電気が出る事』？

目標、『好きな男の子と手をつなぐ事』！

こんなちつちやな私の夢、誰か叶えてくれませんか？

壹菜十七歳にして静電気を同じうせず（後書き）

『いとこひ』はムーンライトさんに投稿中の作品、Shadow Tagの登場人物を一部引き継いでいますが、話自体は独立しています。（Shadow Tagの連載が終わったら、こちらに大人表現を薄めたR15版shadow tagを掲載しようかと考え中です。）

冒頭部分の掲載が済んだら投稿はゆっくりペースになる予定です。お時間ある方、おつきあい頂けたら幸いです。

王子はコンパにいる？ 上

きりちゃんの言い出したコンパは私のため（半分はきりちゃんのためっばい？）とはいえ…。

やだなあ、出たくないなあ。何か上手い言い訳ないかなあ。

十六夜学園はお嬢様学校のネームバリューがあるから、こういったお誘いは昔からちょこちょこあった。

だから今まで合コンで参加した事がないわけじゃないけど、あんまり良い思い出が無いんだよね、私。

上の空で午前中の授業を終え、迎えた昼休み。

お弁当を取り出そうとしていた私の前に携帯とお弁当包みを持ってゆつと現れた背の高い女の子。

彼女の名前は木島裕理。中等部から十六夜の裕理とは中2の頃からのお付き合ひ。

うちのママの手強さも、私の静電気体質もしっかり知ってる。

裕理と友達になりたての頃紹介された当時の彼氏は確かまーくんといつてえくぼの可愛い男の子だった（ちなみに私はまーくん相手に蕁麻疹を出してしまった覚えがある）。

中3の時は別のクラスだったけど、高1、飛んで高3と同じクラスとなつて、わかつた事。

裕理は恋多き女だということ。

私知ってるだけでも裕理の元カレの数は片手じゃ足りない。

男の子と付き合うどころか、二人つきりになること自体ドッキドキな私とはえらい違い。

きりちゃんは「なんであんなのっぽの貧乳がモテるのかしら？」とよく首を傾げているけど、多分裕理のボーイッシュでさばさばしてる性格が付きあいやすいんじゃないかな？

と、裕理の解説はここまでにして、155？の私は170？の裕理を仰ぐ様に見上げた。

「あ、裕理。きりちゃんの言い出したコンパの事だけど、」

やっぱりコンパは断ろうと思っていた私の言葉を裕理が遮った。

「ごめん！いちがやとやる気をだしてくれたのに、今日は進路指導があるから悟の学年は無理みたい」

きりちゃんのもちかけた提案に答えるべく、早速裕理は現彼氏で、浮草市内では1、2を争う進学校、私立瑛明高校三年生の悟君に連絡してくれたみたい。

けど生憎（私にとっては幸いだけど）進学校の三年生は試験期間じゃないとも忙しいと。

「うつん、きりちゃんが言い出したことだから。それにしても瑛明ってすごいね、定期試験の他に模試もしょっちゅうみたいだし。年がら年中試験だらけ。やっぱり進学校は違うね」

「そうそう。エスカレーター狙いのうちらとは違うんだよね。しかも特待生は模試の成績も学費に響くから、みんな必死みたいで」

お気楽私立の十六夜と違って、生徒の大半が寮生活を送るバリバリの男子校、瑛明高校は生徒の半分以上が何らかの形で特待生制度を利用して、生徒の成績によって学費負担額が変わるらしい。

親御さんにはありがたいシステムよね。

成績上位者は学費も寮もなんと全額免除！

あとは有名大学に現役合格すると賞金が出るとか出ないとか。

「そうなんだ。悟君には前に静電気浴びせちゃったし、実は今日もやっちゃわないかドキドキで」

「悟、あの事なら笑ってたからいいの。『俺は壱菜ちゃんの王子様じゃないみたいだね』って」

「なーに、王子様って？壱菜に春が来たの？」

お弁当片手に会話に加わってきたのは木崎まゆり。

十六夜学園高等部の名物双子姉妹の片割れで、私の友達の一人。

三人で机をくつつけながら、裕理は笑いをこらえきれずに口を歪めてる。

「それが笑っちゃうの。悟がね、いちの静電気は、『運命の王子様』

相手なら出ないんじゃないかって言い張って」

「運命の王子様？」

私とまゆりが声を揃えて聞き返した。

「そう。いちの静電気は『王子』以外の男に対する拒絶反応なんじゃないかって。笑っちゃうよね」

裕理は喋りながらも笑っているが、ロマンチストな私は（運命の王子様相手なら静電気たたないのかしら？）と、自分の特異体質を少しだけ良い方向に見直してしまった。

「甘い！」

と喝をいれたのはまゆり。裕理は驚いて卵焼きを箸から落としてしまった。

「だってき菜の静電気、子供とかおじいちゃんとかには出ないじゃない」

「そういえば、そうだね」

さすがに私の王子様が後期高齢者だったり赤ちゃんだったりするのは嫌だな。

「やっぱき菜は心のどこかで男が恐いんだよ。お母さんやおじいちゃんが離婚経験者じゃない？そういうのが心理的に影響して恋愛を拒んでるの」

まゆりはカウンセラーの如く私の分析をしてしまう。

「あれ、いちのそこ、おじいちゃんも×ついてたんだ。荒谷家って代々苦労してるんだね」

「うん、パパの両親は早くに亡くなってらしいし、ママの方のおばあちゃんは生きてるかどうかわから」

「じゃあいちって実は生き別れのいところたくさんいるかもよ」

「裕理、生き別れていところに対して使う？普通親とかきょうだいでしょ」

「あそつか」

裕理が照れ笑いすると、私とまゆりが吹き出した。
いところかあ。

荒谷家って親戚付き合い皆無だけど、私のいとこっているとしたらどんな人だろ？

男？女？年上？年下？

変な人じゃなければ一人くらい会ってみたいかも。

そう思いながら私は肉まきごぼうをフォークでさした。

「いちー、大変！！」

昼休みも残り五分を切ったところで、トイレに行ってた裕理が携帯片手にバタバタと戻って来た。

女の大変って大体候補がしぼれるのよね。ふむ、アレの日か？

「裕理、ナプキンならロッカーの中に、」

「違う違〜う！コンパの話。悟の瑛明の後輩なら今日の放課後集まれるって」

コンパの話は流れたとばかり思ってたから、私はがくつと肩を落とした。

「瑛明？なんの話」

シンクロして答えたのはまゆりと隣のクラスから遊びに来ていた双子の姉妹、いるみ。

木崎姉妹はエリートに弱いから、瑛明とか浮草東とか、進学校の生徒に目がないんだよね。

でも私はやっぱり乗り気になれない。

だって王子様って普通コンパ来る？来ないでしょう。

「二年だって。年下だけどいち、いいよね？」

カチカチとボタンを押す裕理。なんか今まさにOKの返事を打ってるっぽい。

「せっかくだけどその話、」

「ねえ裕理、私も行っていい？」

私の返事を遮って、双子がシンクロして喋る。うわあ、二人とも目が輝いてる。

「まゆりといえるみが来るとなると、あとはきりといちで…」

裕理が指を折っている。ん、人数が多いのかな？

「人数あわないなら私抜きで行けば、」

「何言ってるの、いち！きりとまゆりといえるみ、いちを入れて四人丁度いいじゃない」

裕理は参加しないのね。

こうなったらやっぱり荒谷家の鉄の掟、『男女七歳にして席を同じうせず』を言い訳に…。

「そうぞ。いち、お母さんに連絡しといてね。帰り遅くなるって。コンパの言い訳はホームルームでも図書館でもなんでもいいでしょ？あとで私もいちの家に電話してフォローいれとくから」

うー、退路を断られました。

「年下かあ、ともかくチャレンジあるのみだよ。壱菜」

「年下の王子様がいるかもよ？いち」

王子様の言葉にちょっとだけ上昇しつつも、やっぱりコンパ強制参加が決まってブルーな私。

午後の授業は午前以上に上の空だった。

放課後。目指す場所は浮草駅近くのチェーンのカラオケ店。

集った合コンメンバー四人プラス裕理の五人は早速十六夜学園前のバス停に移動した。

パイプ役の裕理は瑛明の面子との顔合わせまでいて、後は帰るみたい。

バス停でベンチに腰掛けたきりちゃんが、お財布から一枚の黄色い券を取り出した。

「裕理、良く働いてくれたわね。誉めてつかわす」

「はー、霧霞様。お誉め頂き光荣です」

女王様風にきりちゃんが差し出し、騎士風に跪いた裕理が受け取ったのは勲章ならぬきりちゃんの家、パティスリータドコロのケーキ

無料券。

本来ならパティスリータドコロのポイントカード15ポイント溜めないともえないこのサービスチケットは、ことあることに甘い物に目がない裕理に『餌』として使用されている。

「犬ね、犬」

こらあ、木崎姉妹。思った事素直に言っちゃ駄目。

「あ、バスもうちょいだね」

バスが信号で停車してるので、ふっと反対車線に目を走らせると停車している一台の車（形からして外車かな？）にうちの制服の女子生徒が駆け寄って行くのが見えた。

タイツだから高等部の生徒だ。

お迎えかしら？でも保護者にしては若向けなデザインの車よね。

バスに乗り込んだ後もつい気になって女生徒を見ていると、運転席から降りて来た男の人と言い争ってるっぽい？

なんだろ、痴話喧嘩かな。

あつ、アップパー入った。男の人顎押さえてるんですけど…。

男の人はよく見えないけど、武闘派らしい女の子の方は肩すれすれのセミロングの髪、160センチ位の身長、ほっそりした後ろ姿で、あれ？その人、心当たりが…。

私は慌ててきりちゃんの袖を引っ張った。

「ねえねえ、あれ、レンじゃない？あそこの車のどこにいるの」

「んー、私のところだとよく見えないんだけど…、後ろ姿だけじゃねえ」

けど小等部一年の時から高2まで、11年連続で同じクラスだった友人、レンこと富岡恋のことを私が見間違えるわけない。

「レンだよ。絶対！」

「そう？じゃ一緒にいるのお父さんかしら？レンの家、また車買ったのね、いいわねお金持ちは」

「レンのパパはもつと（縦横に）大きいよ」

「じゃあ、あの人レンの彼氏？車乗ってるし、大学生か社会人なの

かな」

裕理のコメントにきりちゃんがかっ！と目を見開いてこっちを向いた。

「そう、そうよ！絶対そう！レン、最近こそそしてると思ったら男ができたのね？」

「いち、何か聞いてる？」

私はぶんぶんと首を横にふった。

「聞いてない…」

レンは車に乗り込んでいる。

やっぱり彼氏なのかな？

相手を確かめたい、レンに真偽を問いただしたい。

けどバスは走り出す。レンの乗った車も走り出す。

あれよと言う間に車は視界から消えてしまった。

「あの車、アルファ メオだったね」

「男、背高かったね。180近いんじゃない？」

さすが木崎姉妹。走ってるバスの中でも素晴らしい動体視力でございます。

「ま、レンの男の事は置いておいて、私たちが知るべき相手は瑛明ボーイよ！」

「そうそ、気持ち切り替えて。いちもね」

裕理がぼんと肩を叩く。

けど私は合コンへの不安以上にレンに対するもやもやが募るばかりだった。

王子はコンパにいる？ 下

自分の容姿に自信があるかって聞かれたら、答えは「NO」。
だって生まれてこのかた、

「壱菜ちゃんはお動物系だね」とか、

「荒谷さんてうちで昔飼ってたハムに似てない？」（何故疑問系なのよ！あなたの家のハムスターなんて知らないわよ！！）とか、

「なんだか見てて和むよね。ゆるキャラみたい」とか言われたことはあったけど、

それって褒め言葉？

女の子はもつとストリートに「可愛いね」とか、「美人だね」とか言われた方が嬉しいの！

もうちょい伸びるのかな？と思いきやそのままストップした155？の身長。

絶対ボン！キュッ！ボン！になるはずって信じてたのに第二次性徴前と大差ない体型。

けど、私の親友、レンは違う。とにかく美少女！

Vシネのヤクザ役が似合いそうなごついパパさんじゃなくて、ミス竜神だったママさんのDNAを受け継いだ容姿のレンは小等部の頃からそりゃあもうお人形さんみたいに可愛かった。

小等部の頃はレンの写真を隠し撮りしてたオジサンが捕まったし、中等部ではレンがよく日傘をさしてたからレンの事を『日傘の君』って呼んで真似する下級生がたくさんいた。

裕理ときりちゃん情報では十六夜の近くの公立校では密かにレンのファンクラブがあったらしいし。

「レンは美人だから高等部に上がったりますますモテそうだけど、彼氏ができて時々でいいから遊んでね」

「何馬鹿な事言ってるの！恋愛なんかしなくたって壱菜達といれば楽しいし、彼氏なんていらないわよ。大体最近の男はヤワすぎるの

よ。男なら熊くらい素手で倒せないと！」

「レン、それは草食化の進む現代の日本男児には厳しい条件じゃないかな……」

「うーん、それじゃせめて私のお父様を倒せるくらいの人じゃないとお断りね」

「……レンのお父さんで確か柔道黒帯だよな」

「空手もよ。最近はお父様鬼瓦流古武術にはまってるの。おもしろそうだから私も習おうかと思って」

「えっ、レンこれ以上強くなるの？」

「こんな会話を交わしてたのに……」

高校に入ってしばらくして、レンには強い彼氏ができたけど、私との友情は変わらなかった。

出会ったきっかけも、付き合い始めた時も、色々あって振られちゃった時も、全部一番に教えてくれた。

私はレンの恋を自分のことのように一緒にドキドキして、一緒に悩んで、一緒にうかれて、一緒に泣いた。

なのに、なんでさっきの人の事は教えてくれなかったんだろ。

小1から高2までずっと同じクラスだったのに、進路選択で高3になって初めて別のクラスになったレン。

離れちゃったのはクラスだけじゃなくて、友情も？

あー、だめだめ。今はコンパに集中しなきゃ！

向かい合って座る三人の男の子達の制服は瑛明の校章のついたグレーのブレザーに黒いシャツ。

高校の制服にしては珍しい黒いシャツは瑛明のトレードマーク。

ブレザーを脱いだり、タイを外したり、規定外のセーターを着たり、どんなに制服を着崩していても黒シャツだけは着ている生徒が多いんだって。

「どうもー、初めまして。瑛明高校2年の桜庭央太です」

第一声はちよつと耳につく「何これ、声変わりしてないの？」ってくらい甲高い声の男の子だった。

「同じく2年の相崎です。十六夜のお姉様方に会えるなんて光栄です！」

「2年の渡里俊です。初めまして」

一人遅れて来るみたいだけど現時点の顔ぶれだけで判断すると、このコンパ、……ハズレです。

みんな頭はいいんだろうけど、ルックス的にはイマイチ…。

桜庭君は四角い顔だし、相崎君は目が細くてつり目。渡里君はニキビがちよつと。

やっぱ王子様は綺麗な顔をしてなきゃ。

NE SのXX君や、関ジニ8のXX君、ジュニアのXXX君みたいだね！

おつと、TVの中の王子様は置いておいて、とりあえず現実をどうにかしないと。

「田所霧霞、高3。ハーフかって聞かないでね。見りゃわかるでしょ？」

きりちゃんの声は氷のように冷たい。そっか、きりちゃん的にもハズレなのね。

「あ、荒谷壱菜です。こ、こ、高三です」

仏頂面のきりちゃんをフォローするつもりが、かみかみになっちゃった。

「木崎まゆりノいるみです」

「一卵性ですか？そっくりっすねえ」

双子はポイントが高いのか、桜庭君がハイテンションだ。

一学年しか変わらないのに、彼等が妙に子供っぽく見えてしまうのはきつとさつきレンと大人な彼氏(?)を見たから。

バスの中では「年下もアリよ」って言ってた癖に、きりちゃんはとっても無気力。

まあ確かに私も好みの顔じゃないんだけど、せつかく組んでくれた裕理と悟君の顔もあるし、もう少し場を和ませないと…。

きりちゃんも携帯いじり出したし、木島姉妹は中　美嘉の曲の取り合いをしてるし、なんだかフリーダム。

男の子達はというと制服着てるのにお酒頼む相談してる。

「ちよつと、それは無茶でしょ！」

私は男の子からメニューをひったくった。桜庭君が顔をしかめる。

「杏菜さん、真面目なんすね」

「この店、瑛明のOBが店長してるから結構緩いんですよ」

「う…、それでも駄目なものは駄目！」

こういう時盛り上げ上手な裕理はとつくに帰っちゃったし、残りの男の子はなかなか来ないし、この合コンどうなる？

二人でPUF　Yを歌う木島姉妹にあわせてタンバリンを振る私。

うーん、きりちゃん、静電気体質ってこんなことしてて治るのかな？

ああ、こんな場所で成果の無いコンパに参加するよりいつそレンの家にでもおしかけてさっきの真相解明したい！

レンのママの愛^{めぐみ}さんとはジャニ　ズファン繋がりで仲が良く、たとえレンが隠しても愛さんが教えてくれるはず。

ごちゃごちゃ考え事をしてるうちに、タンバリンを振る手は止まっていた。

テーブルに散らばる空になったウーロン茶やらカルピスやらのコップ。

私も男の子達も何曲かずつ歌ってるんだけど、イマイチ盛り上げりにかけたまま。ああ、しんどい。

けど、こういう空気のためにこそ真打ちが登場するものなのよ。

そして、そんな私の期待に答える様にタイミングよく、『彼』はやって来た。

カチャリ―

「すみません、遅くなりました」

そう言いながら入って来たのは瑛明の校章つきブレザーの中に白いシャツを着た男の子。

あれ、なんで白シャツ？

一瞬気になったけど、シャツの色以上に目を引くのは、彼が先に来ていた三人とは違って、女の子でも通せそうな端正な顔だってこと。ちよつと色素の薄そうな肌、くりくりした目、通った鼻筋。

そう、まさにジャニーズ系、これぞ正統派王子様！

やつぱいるじゃない。頭が良くって顔もいい男の子！！

「おいおいセナ、なんでお前が来るんだ？中村は？」

「中村先輩は委員会が抜けられないって。僕はたまたま生徒会室に顔出したら悟さんに頼まれちゃって」

「うつわ、悟さんマジ空気読んでくれよ。なんでよりによってセナを寄越すんだ」

「僕が来ちゃ駄目でした？」

「お前がいると俺等全員雑魚化なんだよ！」

へえ、この子セナ君って言うんだ。綺麗な顔には綺麗な名前が似合うよね。

高2の桜庭君達相手に敬語だからセナ君は一年なのかも。

きりちゃんもセナ君をガン見してるし木崎姉妹も歌を中断して二人でひそひそ囁き合っている。

今日の収穫は、『静電気克服』じゃなくって『セナ君で目の保養が出来た事』で決まりだね。

「瑛明の『ホワイトカラー』、初めて見た……」

きりちゃんがぼそつと呟いた。

『ホワイトカラー』って事務系職種の人達、つまりサラリーマンの事よね？

セナ君とサラリーマンがイコールで結びつかないけど、何か別の意

味でもあるのかな？

とにかく、爽やか少年のセナ君は男女できつちり別れている二つのソファを交互に見渡し、そして私の方を向いた。

「僕、こっち座っていいですか？あっち男ばつかでむさ苦しいから確かにこの部屋、三人しか座ってない男の子側のソファより、四人座ってる女の子側のソファの方が余裕があったりする。」

男の子側のソファにセナ君が座ったらぎゅうぎゅう詰めになっちゃう。

いきなり隣に座られるってことに抵抗と気恥ずかしさがあつたけど、セナ君があんまり堂々としてるんで、私はドキドキしつつも横にずれてセナ君の為にスペースを開ける。

「どうぞ……」

「すみません」

セナ君が座ると、ふわっと何かの香りが流れて来た。

シャンプーじゃない、何かの香水だ。綺麗な男の子は香水をつけるのね。

とか考えてたら制服にちよつと違和感。スカートが引っ張られてる様な……。

ありゃ、セナ君にスカート少し踏まれちゃってるみたい。

手で直そうとすると、セナ君もスカートを踏んでた事に気付いたのか、同じ方向に手を伸ばしている。

ヤバイ、ぶつかる。こんな綺麗なお顔立ちの男の子に静電気浴びせたら可哀相。

頭では理解してるのに、私の運動神経は役立たず。空中で私の手とセナ君の手はニアミスでなく、しっかりとぶつかってしまう。

「……！」

私は思わず顔をしかめた。けど、いつものバチバチ音は聞こえない。あれ、不発だったのかな？

「……？」

ぶつけた感触の残る手をじっと見る私。そんな私を見てセナ君は、

「手、痛いのか？」

あろうことか私の手を直に握ってる。

これはさすがに電流がバチバチと……。

「……？」

あれ、無音。ついでにセナ君はとつても無反応。電撃をくらった顔にしては涼しすぎなんですけど。

どういうこと？ 答えを求める様に横を向けば、木崎姉妹もきりちゃんもあっけにとられてる。

「セナ君、君、男、だよな？」

異常な事態（本当は正常な事なんだけど）を目にしてきりちゃんがセナ君に問いかけた。

「……、十六夜のお姉様方ってそういう趣味？ 僕脱いだ方がいい？」
セナ君が立ち上がってベルトに手をかけた。

こんなところでストリップは幾ら何でも刺激が強過ぎだよ。

「駄目！」

私は思わずセナ君の両手を？ んだ。

やっぱりバチバチ音が無い。静電気は出てないんだ！

「冗談。振りだけだって。そのハーフっぽいお姉さん、ご存知だ
と思うけど瑛明は男子校だよ？」

セナ君は私の手をそつと戻して何事もなかったかのようにソファに座り直す。

「なんで白けてるの？ 歌おうよ。ここカラオケなんだし」
平然と言い放つセナ君。

カタログを片手にリモコンでナンバーを打ち込んで行く。

いつの間にかケツ イシのイントロが流れていた。

「「王子だ」」

相崎君が熱唱してるのに木崎姉妹がそう呟くのが聞こえてしまったのは私が地獄耳だからだろうか。

「ねえ、名前は？」

「あ、荒谷、い、莚菜……」

「いち、な、ね。ふうんじゃあ、いつちゃんって呼んでいいかな？」
「親しい人からは基本「莚菜」って呼ばれる私。例外は裕理が「いち」って呼ぶ位？」

聞き慣れない呼び名に戸惑いつつも、王子フェイスのセナ君に見つめられて否定なんて無理！

私はかくかくと首を縦に振った。

「よろしくね、いつちゃん」

「よ、よろしく、セナ君」

差し出された右手を握り返す事に戸惑いを感じなかった。

これはセナ君が私の『運命の王子様』だから？

どさくさ紛れて渡里君の肩をつついてみたらやっぱりパチパチ音がして、ちよつと痛がつてた（試してごめん）。

「セナ、セナって確か……？あの子……」

きりちゃんの眩きも、訝し気な瞳も、私には届かない。

ただただ隣に座る年下の男の子にドキドキして、悟君の仮説『運命の王子様には静電気が発生しない』が頭の中をぐるぐる回っていた。

王子はコンパにいる？ 下（後書き）

ようやくあらずじ詐欺にならない展開になってきました。

あと1話分ストックがあるので、手直し次第掲載予定です（今日か明日？）。

ここまで読んで頂いた方、お気に入り入れてくれた方、ありがとうございます！

視線、挑戦、赤外線

セナ君の登場で瑛明の男の子達のライバル心に火がついたのか、後半はなんとか盛り上がった瑛明コンパ。

店員さんの「時間です」コールと、

ママからの「野菜、いつ帰るの？」メールが重なって、今日はお開きが決定した。

これが大学生とかのコンパなら二次会とか、気に入った人同士抜け出したりするんだろうけど、なにせ私たちは高校生（桜庭君達がお酒を飲もうとしたことは目をつむって）。

その辺いたって健全です。

一応お嬢様学校で名の通っている十六夜の生徒が夜ふらふらしてたら目立つし、

全寮制の進学校である瑛明の生徒には門限があるそうだ。

お店を出る前にトイレに寄った私は、鏡の前で今日の出会いを反省する。

せっかく「いっちゃん」って呼び名までつけてもらったのに、カラオケが盛り上がってから席がごちゃごちゃになって、セナ君とはあんまりお話しできなかったんだよね。

もうちょつと話してみたかったな。

カラオケみたいな五月蠅い場所じゃなくて、カフェとか、もっと落ち着いたところで。

カチャツ―

「あれ、野菜じゃない」

トイレの個室の扉が開いたと思ったら、中から出て来たのはきりちゃんだった。

「きりちゃん的にはどうだった？今日のコンパ」

「うーん、やっぱり今の彼氏と仲直りしようかなって思い直し中。」

「壹菜はセナ君のこと気に入ったんでしょ？」

「……ばれてたの？」

「丸わかりよ。木崎姉妹も笑ってたわ」

「あら。カラオケの間、私がセナ君を目で追ってたのはバレバレだったみたい。」

「きりちゃんはどう思う？あの……」

「ああ。あの事？」

「あの事とは、私の対男性兵器、電気攻撃が何故かセナ君には発動しなかったこと。」

「きりちゃんにも言うべきかな？裕理の彼氏悟君の唱えた『運命の王子様』仮説。」

「嬉しい？壹菜の運命の王子様候補が頭脳明晰、容姿端麗のエリートで」

「つて、えっ、きりちゃん、なんで知ってるの？裕理に聞いてたの？悟君の仮説」

「行きのバスの中で裕理が話してたじゃない」

「そうだったのね……。レンとその彼氏を見たショックでバスでの会話はほとんど上の空だったんだ。」

「それにしてもセナ君の登場以降は、レンに関するもやもやが綺麗に吹き飛んでた。」

「私って単純？」

「セナ君が壹菜の静電気に遭わない理由は謎だけど、まだあの子があんたの『王子様』って決まったわけじゃないから。静電気克服の足がかりとして利用するのはともかく、恋愛対象として壹菜に相応しい相手かどうかは別よ」

「利用って、そんな悪女みたいな……」

「年下の男の子を利用するだけして、あとはぼいってこと？セナ君にそんなことできないよ。」

「ああ、壹菜にそんなスキルないのわかってるから。大丈夫、私たちがしっかりサポートするわよ」

「なんだか今日のきりちゃん、ウチのママに似てるかも」

「ええっ！あの超堅物ママと一緒に？」

そんな露骨に嫌な顔しなくつても。まあ、ママは確かに堅物ですけど。

「あつ、やつぱここだった」

入り口からひよっこり顔を出したのはいるみ。

「二人とも、もうお店出るよ」

というわけでトイレの井戸端会議は強制終了。

「ねえ、いるみは好みの人いた？……、その、セナ君とか」

私は恐る恐る口にした。いるみが「NO」と言ってくれないかと期待しながら。

「え、私？うーん、まあ美形だとは思うけど、私が思うにあの手顔は相当あそ、んぐぐ」

いるみは何かを言いかけてたのに、慌てて口を押さえた。

「阿蘇？阿蘇が何？」

きりちゃんがいるみの耳を引っ張ってなにやらぼそぼそ囁いてる。

何の話してるんだろ？あ、終わった。

「べ、別になんでもないの。とにかく、壹菜はセナ君の事気に入ってたんでしょう？けど、まゆりがね」

「まゆりもセナ君がタイプ？」

私は慌てて聞き返す。

だって木崎姉妹って全盛期のレンには及ばないけど、双子の括りはずして単品でもかなりモテるんだよ。

でもって今は二人ともフリー！。

私が太刀打ちできるわけない。

「違う違う、まゆりがね、瑛明のセナって名前、聞いた気がするんだって」

「そういえば私もセナ君の顔、どこかで見たことある気がするのよ。けど、そうしても思い出せなくって。結構前だったと思うんだけど、

もつと大人っぽかった気がするし……」

きりちゃんが悩んでる。私ならセナ君みたいなイケメン、一度会ったらず忘れられないと思うけどな。

「あつ、パティスリータドコロのお客さんだとか？」

「それならそれでいいんだけど……。この辺まで出かかってるのに思い出せない……。あゝイライラする！」

「……どうどう」

二人できりちゃんをなだめながら、みんなの待つエントランスへ向かった。

さて、コンパといえば恒例のアレがやってきました。

「霧霞さん、番号聞いていいですか？」

桜庭君が猫なで声ですりよって来て、きりちゃんは「ちっ」て舌打ちしながらも携帯を出した。

私は顔の好みはおいておいて、とりあえず番号交換はするんだけど、ママに携帯見られても見つからないように後で偽名にする工作（女の子の名前に変えとくとか）が必要なうえに、結局一、二度メールをして終わりってパターンが多いんだよね。

だってママの目を盗んでまま会いたいと思う男の子ってレアなんだもの。

それに、友達みんなから「壹葉は面食いだよね」って言われる私が好きになるような男の子は、私みたいなちんちくりんにはあんまり興味を示さないか、とつくに可愛い彼女がいたりする。

「壹葉さん、交換しましょうよ」

私に話しかけて来たのは相崎君。

「あつ、俺も俺も」

ついでに渡里君もやってきた。

うーん、どうせならセナ君と交換したいな。けど肝心のセナ君は木崎姉妹とお話中。

やっぱり私みたいな小動物より、双子の方が気になるに決まってるか…。

わかってる。わかってるけど、少しむなしい。

ちなみに、こういう時の木崎姉妹は凄い。

「私達のどっちかわかるなら、アドレス教えてあげる！」

同じ顔で同じ髪型で同じ声でシンクロして言われたら、大抵の男の子は挑戦する気がそがれると思うんだ。

けどセナ君は強者だった。

「僕から見て右がまゆりさんで左がいるみさん」
ピンポンピンポン。

「うっ」

セナ君が迷い無く一発で当てた（しかも即答）ので、双子がたじろいでいる。

ちよつとちよつと、これは凄い事ですよ！

私なんて中等部で三年間かけても二人の区別がつかなくって、高等部でやっとだよ。

区別する気がないきりちゃんなんかいまだに「木崎姉妹のどっちか」とか、「双子の片割れ」とか呼んでるくらい。

「すごいなセナ、なんでわかるんだ？勘か？」

「先輩は双子を双子としてワンセットで見るから失敗するんですよ。一人一人で見れば全く別の人間でしょう？」

「双子なのに一人、一人、ねえ。やっぱ『ホワイトカラー』は女に關しても言う事が違うな」

相崎君はひがんでるのか、ちよつと言いつ方に棘がある気がする。

双子とアドレス交換してるセナ君を遠目で見ながら、私はむっつりしたままのきりちゃんを呼び止めた。

「ねえきりちゃん、さっきから時々聞くけど『ホワイトカラー』って何？サラリーマンの事じゃないみたいだけど」

「ああ、それは瑛明の各学年上位三名のことよ。授業料も寮も制服代も全部免除のスーパー特待生。制服は黒いワイシャツが規定の瑛

明で、彼等だけが白いシャツを着る事が出来る。それが瑛明の『ホワイトカラー』」

「わゝ、そんなすごい子だったんだ。セナ君って」

「存在は知ってたけど、私も初めて見たわ」

瑛明の生徒は確か千人超。各学年三名なら三学年あわせても9人。瑛明高校の中で1%以下の超レアなエリートなのね、セナ君って。何話してるの？お二人さん」

「セナ君！」

きりちゃんの横からセナ君がにゅっと顔を出した。噂をすれば影ってやつね。ああ、びつくりした。

「いっちゃん、番号聞いてもいい？」

「う、うん！もちろん」

きりちゃんは気を聞かせてくれたのか、そろそろと私たちの側を離れて行く。

「なんだか僕、霧霞さんに嫌われてるみたいだね」

赤外線の応答待っていると、セナ君がぼそりと呟いた。

ひよっとして、セナ君は私じゃなくてきりちゃんと仲良くなりたかったのかな？

「セナ君、よかったらきりちゃんの番号も送ろうか？」

私の提案にセナ君は困った様に笑う。

「僕がまた会いたいって思ったのは今日の女の子の中ではいっちゃんだけだよ」

「え、でもさつき双子と番号を、」

「ああ。あれは、先輩達ことごとく失敗してたから興味でただけ。ゲームみたいなもんだよ」

「そ、そっか…」

こういうとき、もつと気のきいた言葉が出て来ないのは私が男の子慣れてないから。

バスターミナルまで歩く道のり、セナ君は私の横を歩いてくれた。感覚的には裕理と同じ位の身長。ってことはセナ君も170？前後

かな？男の子だからまだ伸びるんだろうね。

「瑛明って水面市すれすれの僻地にあるから、この時間帯だとバスが少なくなってる」

「う、うん、大変だね」

「いつちゃんって三年なんだってね。てっきり僕とタメかと思ってた。今更だけど、敬語使った方がよかった？」

ぶんぶんと首を横に振るう。

「そのまま、大丈夫」

セナ君は時々話しかけてくれたんだけど、私はちぐはぐな返事をしちゃうばかり。

私の方が年上なのに、セナ君に気をつかわせてしまつて恥ずかしい！けど、セナ君の隣を歩いてるってだけで私は完全に舞い上がっていた。

バスターミナルでみんなにさよならを言つて、バスに乗り込んでからもセナ君の言葉がずっと温かく、私の中で響いていた。

「僕がまた会いたいって思ったのは今日の女の子の中ではいつちゃんだけだよ」

その言葉はお世辞？それとも本心？

けど、また会いたい。

私もそう思ったのは、本当の事。

TVの中からこんばんは

バスを降りると見慣れた車が一台道路脇に停まっていた。

十六夜の生徒の家の車は小等部＞中等部＞高等部の順で外車率が高いけど、うちの車は国産のマチ。

ママは車にはこだわりがないから、低燃費でちゃんと走ればなんでもオツケーな人。

「ママ、わざわざ迎えに来てくれんだ」

「夜道を若い娘が一人で歩くものじゃないわ」

うちはバス停までは私の足で徒歩10分強。

途中には交番もあるし、コンビニもあるし、人通りもそんなに少ないんだけどね。

とにかく、いつもより遅い帰宅をした私をバス停までママが迎えに来てくれたのだ。

「壹菜、さっき家に木島さんからお電話あったわよ。あなたからノートを借りっ放しだったから明日学校で返しますって伝えて欲しいって」

裕理は約束通りアライバイ工作の電話を入れてくれた。

ちなみに今日は「日本史のグループ課題を図書館で調べてから帰ります」という名目で、口裏をあわせていたり。

よかった。ママの顔を見る限り、『嘘』はバレてないみたい。

「木島さんで中等部からのお友達でしょう？あの子、男女関係が派手だって筒井さんのお母様が言ってたけど、壹菜、あなた変な影響受けてないでしょうね？」

「そ、そんなわけないじゃない。ママ、裕理は中等部から一緒の大事な友達だよ」

「そうはいつでもね、あなたとは小等部から一緒の富岡さんも最近はいい噂聞かないし、十六夜も高等部になると風紀が乱れてよくないわね」

確かに中等部の頃に比べると、高等部の方が彼氏持ちの子が多いけど、そんな言い方しなくても…。

彼氏がいてもいなくても、みんないい子達なんだよ？

「やっぱり富岡さんのところはお母様が若い頃相当派手な方だったって聞くし、娘が似てもしょうがないのかしらね」

「ママ、レンのこと悪く言うのやめてよ!!」

「あら、聞いた噂をあなたに伝えただけよ」

これ以上の反論は無駄。だってママはひかない。そういう人だから。車庫前で車が止まると私は無言で車を降りた。

「早く制服脱いでらっしゃい。ごはんにするわよ」

私は返事をせず、階段を駆け上がった。

自分の部屋に入るや否や、私は鞆から携帯を取り出した。

制服に皺？そんなこと構ってられない。

昔から、ママは平気で私の携帯を覗く。

うつかり男の子の名前の履歴が残っていようものなら、

ママ自ら電話して「あなたうちの壱菜とどういう関係？」なんて問いただされちゃう。

ちなみにメールも同じ反応ね。

私の携帯は私のものであって、私のものでないというか…。

私の持ち物だけど、「お金を払っているのは親なのだから何も悪い事はないでしょう？」それがママの言い分。

日本全国の保護者がそうなら、中高生の学校裏サイトとか、出会い系サイト閲覧とかの問題が減るんだろうけど、

うちのママみたいな人はレアなんだろうね。

ロックをかけたり、変に小細工をいれると「壱菜が男とこそそそ連絡をとってる！」って勘違いして携帯そのものを没収されちゃうから、無駄な抵抗。

私にできる自己防御は男の子の名前を女の子っぽい名前に変えたり、変な内容のメールはすぐ消したり、フォルダーを分けたり。

今日の男の子達もフルネームそのままとママに見られた時に勘違いされるから、名前を微妙に変えておこう。

でも、正直セナ君以外の男の子とは今後も積極的に連絡をとる気がしないから、消しちゃっていいかな。

心の中で「ごめんね」と呟きながら、私は桜庭君、相崎君、渡里君のアドレスを消去する。

最後にセナ君のアドレスを探す。

そういえばセナ君ってセナが名前なら名字は何？アドレスどこに入ってるんだろ？

赤外線交換した時、緊張してたから画面をちゃんと見てなかったんだよね。

馬鹿だな、私。一緒に歩いてる時にでもそつという話をすればよかったのに。

私はあ行から順番にスクロールする。

セナ君のアドレスを見つける為。

消す為ではなく、ママの目から護る為に。

ブルルル、ブルルル、ブルルル、

こそこそしている時に、携帯が振動するのは心臓に悪い！

ばくばくしたままの心臓を胸の上からそつと押さえた。

『メール着信 瀬名零斗』

ん？瀬名零斗、せなれいとしてひょつとしてセナ君のフルネーム？セナって名前じゃなくて、名字だったのね。

爆弾処理をするわけでもないのに、妙に緊張しながらボタンをクリックする。

題 もう家に着いた？

本文 今バスに揺られ中。

今日はいっちゃんに会えてよかった。

また遊ぼう。

別にデコメできらきらしてるわけでも、絵文字も顔文字も何もない、シンプルなメール。

けど、飾り立ててない分、なんだか社交辞令でもない、セナ君の本当の気持ちのように思えて、嬉しかった。

メールの返信も大事だけど、あんまりママを待たせると不審に思われる。

だから今優先すべき事は一つ。

瀬名零斗のアドレスを呼び出した私は、編集をクリックする。

瀬名零斗から一文字外して瀬名零にするだけでも女の子っぽい名前になるよね。

けど、斗の字を消しながら、セナ君がつけた「いっちゃん」の呼び名がふいに脳裏に甦った。

「零斗君かあ、零、れい、れいちゃん…」

私は思い切って瀬名零の字も全て消し、ひらがなでれいちゃんと入力し直した。

私が^{いち}で、セナ君が^{れい}零。

偶然だろうけど、偶然じゃないかのような名前の共通点。

「『1』と『0』だね」

リボンをほどきながらふと鏡を見ると、私は他人が見たら気持ち悪いくらい、にんまりと笑っていた。

可笑しいからじゃない。

嬉しいから。

おっと、ママに変に思われちゃう。一階に下りる前にこのにやけ顔は直さないと。

平常心、平常心。

両手でぺちぺち頬を叩き、私はカーディガンに腕を通した。

私たち母子が暮らすこの家は元々画家であるおじいちゃんの所有

する家で、アトリエは勿論、温室もあるし、屋根裏も地下室もあつたりする。

昭和の半ばに建てられたこの家はお世辞にも綺麗とは言えないけど、私は古くともこの家が好き。

ちなみに去年からおじいちゃんは東京にある美大の講師を頼まれて、年の半分以上は東京にいたので、今日もママと二人だけの食卓。私は食卓に座る前に、TVのスイッチを付けた。

ママは元々は食事中TVをつけるのを嫌がる人なんだけど、おじいちゃん抜きで二人っきりの食卓は静けさが引き立ってしまうので、ママ自らがTVを解禁した。

見るのはニュース番組だったり、ドキュメンタリーだったり。

ママの嫌う、低俗な芸能ネタと、くだらないスポーツが比較的少ない番組を選ぶとどうしても限定されてしまう。

「続きまして、去年亡くなったレイモンド・マクワイヤー氏のコレクションの一部がチャリティオークションに……」

男性アナウンサーがニュースを読み上げている。

カチャン、

ぼうつとTVを見ていた私は、ママがお皿を鳴らしたのを不思議に思つて視線を戻した。

スプーンがお皿からはみ出して、テーブルを汚している。

ママはTVを見て、わなわなと震えていた。

画面に映るのは故人のコレクションの一つだろう、優しい風景画。

あつ、あのタッチはおじいちゃんの絵かな？

おじいちゃんの絵は海外ではそんなに有名ではないと思つてたから、故人とはいえ海外にもファンがいたとわかつてちょっと嬉しい。

次々と映る絵画コレクション。ゴッホっぽいタッチもあればこつちはレン・ラントっぽい。

このマクワイヤーさんは色々な画家の絵をコレクションしてたみたい。

ニュースはまださっきの続き。

先月89歳で亡くなったどこかの国の大富豪、レイモンド・マクワイヤーさんの遺品には日本円にして何百億円とかの聞き慣れない数字の珍しい宝石があるとかないとか。

でもそれも遺産のほんの一部。

十六夜はお嬢様学校って言われてるけど、この人の資産額を聞いたらみんなお嬢様どころか大貧民だよ。

続いて画面に登場したのは故人の奥さんだと思われる老婦人。

あれ？白人じゃなくってアジア系の顔立ちをしてる。

ちよつとけいけど、お金持ちの奥さんってみんなこんな感じなのかしら（デ 夫人とか）。

ママは相変わらず画面に釘付け。

やっぱり、ちよつと変。

「ママ、さっきおじいちゃんのタッチに似た絵があったけど、ひよつとしてこの人、おじいちゃんと面識あったの？」

私の問いかけに、ママは珍しく抜け殻の様な目でちらりとこつちを見た。

そしてすぐに画面に映る老婦人に視線を戻してしまった。

タマコ「マクワイヤー夫人ってテロップが出てる。

えっ、タマコさん？タマコって日本の名前よね。

「タマコって事は、この人日本人なのかな？ちよつとデ 夫人っぽいね」

「...の人、...なのよ」

ママは渴いた声で何か喋ったけど、上手く聞き取れない。

「ママ、何か言った？」

「.....、この人、私の母親なのよ」
カチャン。

「.....え？」

今度は私がスプーンを転がす番だった。

「ママの、ママ？」

「まさか外国で再婚してたなんて...。タマコ「マクワイヤー、私に

とって彼女の名前は荒谷珠子。私の母親。私を産んだ人。つまりあなたのおばあちゃんよ」

「嘘おっ！」

タマコ「マクワイヤー、彼女が日本にいた頃、数十年前に名乗っていた名前は荒谷珠子。あらたにたまこ

私のおじいちゃん、知る人ぞ知る画家、あらたにいわお荒谷巖の元奥さんで、私のママ、あらたにあやこ荒谷麻子のママ。

このTVに映る第二のデ　夫人みたいなド派手な老婦人が、私の生き別れの実のおばあちゃんってこと？

『ひょうたんから駒』、ならぬ『TVからおばあちゃん』な事態にびっくり仰天の私。

そんな私に追い打ちをかけるように男性アナウンサーが読み上げた一文は、

「タマコ夫人は来月、日本国内でのチャリテイオークションを予定しており、」

ん、今日日本でオークションって言った？

ってことは異国で暮らしてたおばあちゃんが日本に帰って来るのね。ママは嬉しいってよりも、困った様な、悲しそうな、複雑な表情をしている。

数十年ぶりに会ったろうけど、おじいちゃんと離婚して以来ママとも音信不通だったって事を踏まえると、

感動の再会ってわけにはいかないだろうね。

TV画面の中ではマイクをむけられたおばあちゃんが胸に輝く宝石を片手ににっこり微笑んでいる。

なんでもおばあちゃんがレイモンドさんに送られた時価数百億（！？）の宝石、『エーゲの暁』と呼ばれる幻のダイヤモンドが注目されてるみたい。

「今回のオークションの利益は全てユニ　フと赤字に寄付する予定ですの」

へえ。お金持ちはぽーんと寄付なのね。

「名工D＝シュミットの作品で、かつてアポロニア王朝が保持していた幻の宝石、『エーゲの暁』はオークションに出品されるのですか？」

「いいえ、この『エーゲの暁』はオークションには出さず、孫娘に譲りたいと思っていますの」

「確かレイモンドさんのお孫さんは全員男の子では？」

「わたくし、日本にも娘や孫達がおりますの。会えるのが楽しみですわ」

「「ええーつつー！」」

あつ、珍しくママも叫んでる。

いつも静かな母子の食卓なのに、今日は別の家みたいに賑やかになつてしまった。

TVの中の『おばあちゃん』のおかげで。

遠い異国の地に住む私のおばあちゃん、タマコ＝マクワイヤー。

おばあちゃんの出現は、ママの教育方針『男女七歳にして席を同じうせず』にくるまれて育つて来た私の男つ氣のない生活に大きな一石、いや、高価な宝石を投じる事となる。

けど、それでどんな騒動が巻き起こるかなんて、今の私は知る由もない。

TVの中からこんばんは（後書き）

やっとおばあちゃん登場です。

ストック切れにつき、今後の更新はゆっくりペースになるかとおもいます。

セレブなおばあちゃんは好きですか？（前書き）

久しぶりの更新です。

日付をまたぐかもしれませんが、もう何話が更新予定です。

セレブなおばあちゃんは好きですか？

タマコ「マクワイヤー」。

カメラを前にして全く物怖じせずに堂々とインタビューに答えるこの人が、

おじいちゃんの元奥さん「ママのママ」私の実のおばあちゃん、みたい。

現役女子高生の私がほぼスッピンなのに、おばあちゃんは実年齢を感じさせないばっちりメイク。

（ちなみに睫毛はふっさふっさを通り越してばっさばっさ。唇はグロッシー。何故か染み皺が見えない白い肌）

私なんかVネックを着ただけで「いやらしい」ってママに怒られて夏でもタータルネック推奨なのに、おばあちゃんはほんと胸元の開いたロングドレス。

（しっかり谷間も映ってます。私もよせてあげたらできるかなあ、谷間）

おまけに耳に首も腕も指もあっちこちでキラキラ輝くアクセサリ
ーの数々。

どれをとってもやたらめったら大きな石がついてるんだけど、それ本物ですか？

となるとトータルコーディネートおいくらなんでしょう??

「CMの後は、かわいい動物の赤ちゃんが登場です！」

ぬいぐるみみたいにホワホワな毛のウサギの赤ちゃんがちらっと映
つてから、TV画面はコーラのCMに変わった。

ママと私は同時にTVから顔を戻した。

おじいちゃんとおばあちゃんが離婚したのはママが子供の頃の話。

私が産まれる何十年も前の事だから、当然ながら私は生まれてこの
方おばあちゃんに会った事がない。

「おばあちゃんの事、ママは知ってたの？」

私は出来るだけ平静を装ってママに尋ねた。

ママは静かに首を横に振る。

「結婚式の時、私は『あんな人呼ばなくていい』って言ったのに、あの人が勝手にあちこち当たって……。わかったのは日本にはないらしいってことだけで……」

（多分あんな人〃おばあちゃん、あの人ってのはやっぱり私が小さい頃にママと離婚した私のパパの事かな。ほんと、うちってややかしい）

「じゃあママも知らなかったんだ、おばあちゃんの事。ねえママ、さっきのTVの情報だとおばあちゃん、日本に帰ってくるみたいだけど、もしかして私たちに会いに日本に帰って来るのかな？」

さっきまで力の抜けてたママの顔が、一気にこわばる。

そしてしばしの無言。

「……あの人はちやほやされるのが大好きだから、日本のメディアに取りざたされて調子に乗ってるだけよ。大人しく外国で隠居してればいいものを」

ママの言い方にはとげがあった。

実の母親なのに嫌悪感隠す気ゼロって感じで、私の心はちくりと傷んだ。

「でも、でも、おばあちゃんは純粹に日本が恋しいのかもしれないじゃない。それにママともずっと会ってないんでしょ？親子なんだからきつと、会いたがってるよ」

「どうだか？家庭をほっぽり出して、せいを出すのは自分を美しく見せることだけ。男を渡り歩く度に、父親の違う子供を産んで、その男に飽きたら子供ごと捨てて次の男へ……その繰り返し。あんな最低でふしだらな人、私の母親だなんて考えてたくもない。頭下げられたって会う気なんてさらさら無いわ」

「そ、そうなんだ……」

うーん、ママの教育方針、『男女七歳にして席を同じうせず』はパ

パとの離婚だけに起因するんじゃないくて、どうやらおばあちゃんの事も深く絡んでそうね。

「とにかく、壺菜も会いたいなんて気軽に考口にしちゃダメよ。そうだ、お父さんにも釘を刺しとかないと…」

ママは食事中なのにも関わらず、東京にいるおじいちゃんに電話をかけようとはたばたと部屋を出てってしまった。

「明日は洗濯日となるでしょう。明後日からは気圧の低下で…」一人残されたテーブルでお日様マークが並んだL県の地図をぼうつと眺めながら、私はぬるくなったシチューをスプーンですくう。母子家庭なのに私が小学校から私立の女子校に通えてる時点で、うちのことを生活苦って思う人はレア。

それは画家としてそこそこの成功をおさめているおじいちゃんのおかげで、幸いうちはお金に困った事は無い。

けどお金持ちかって聞かれたら、おじいちゃんもママも散財を好まないし、むしろ儉約家。

家は小さくないけど古いし、車だつて国産車。

十六夜のいかにも資産家のお嬢様って感じの子達と比べると、私は絶対に庶民。

温室育ちであることは認めるけど、十六夜だから全生徒がお嬢様ってにくられると抵抗がある。

だからさっきのTVでおばあちゃんの再婚相手が大富豪って聞いて、やっぱりデ　夫人っぽいつて思いつつ、

「セレブ（ただし男性遍歴が派手）なおばあちゃん、かあ」

心の声のつもりが独り言になってしまった。

（おばあちゃんがセレブなら孫の私もセレブな世界にお近づき！ひよつとして社交界デビュー？）

なぐんで妄想が頭をかすめちゃったり。

けど、ひっかかるのはママがおばあちゃん話をする時の苦虫を噛み潰したようなあの顔、そしてめった斬りな人物評。

さすがにああも批判されちゃうと、私もあんまりおばあちゃんに好感は持て……ないかも（ごめんね、おばあちゃん）。

廊下からキンキンとママの金切り声が響いてる。

多分電話でおじいちゃんにおばあちゃんの事を報告しつつヒートアップしちゃってるんだろうな。

数十分後、おじいちゃんとの長い電話を終えたママは、

「実際にあの人に会った訳でもないのに、今日は疲れたわ」

となんだかやつれた顔で早々と就寝してしまったので、おばあちゃんについて詳しいことは聞けず仕舞だった。

「はあ」

おばあちゃんに対する疑問がもやもやと胸にうずまいたまま、湯船でため息をつく。

（亡くなってるって聞いた事は無かったけど、まさかあんなセレブだったなんて）

荒谷家は親戚うちというものがほとんどいない。

まずパパとママが離婚してる関係でパパの方の親戚付き合いはゼロ。でもって、ママはおじいちゃんの一人娘で、おじいちゃんも一人っ子。

小さい頃からおじいちゃん、ママ、私の三人家族で、それで全てだと納得してた。

それが今日、おばあちゃんがいるって言われて、それが予想の範疇を大幅に飛び出たセレブおばあちゃんだったから、素直に血の繋がりを喜ぶより、別世界の人が血縁でしただっていうびっくりが先で。曇った鏡の水滴を吹いて、鏡の中の自分を見つめた。

鼻は高くないけど、目はちゃんと二重でぱっちりしてると思うの。

丸顔なのは、骨格か、それとも食べ過ぎ？

「似てる、かなあ？」

ママと私は似てると思うけど、おばあちゃんはある程度似てなかった気がする。

ということとはママも私もおじいちゃん似なのかもしれない。

（それとも化粧のせい？ママはナチュラルメイクだけど、おばあちゃんのコテコテメイクだったし）

そつえば、さっきのTV、おばあちゃんは確か「日本にも娘や孫『達』がおりますの」って言ってたような。

ってことは、私っていわゆる『いとこ』がいるんだ！

どんな人だろ、かつこいいお兄さんかな、それとも素敵なお姉さんかな？

待て待て、ひよつとしたら私が最年長で、いとこはまだ赤ちゃんって可能性だつてあるよね。

あつ！大事なことを忘れてた。

おばあちゃんの再婚相手が『外国人』ってことは、ひよつとして私ってハーフかクォーターのいともいたりするの？

金髪碧眼のいとこ！きゃー、マンガみたい。

それともきりちゃん（きりちゃんは日仏ハーフ）みたいに、色素が薄い感じなのかな？

「外人のいとかあゝ。ちよつといいか、…も…、つつくしゅん！」
鏡の前で妄想してるうちに体が冷えてしまった私は慌てて湯船につき直した。

その日、恐らく何人かは存在するであろうまだ見ぬいとこ達の存在に思いを馳せながら、私は眠りについた。

大事な何かを、綺麗さっぱり忘れたまま。

「聞いたわよ、杏菜。ついに静電気出さずに男の子に触れたんだって？進歩したじゃない」

レンによしよしと頭を撫でられて私は上機嫌。

「いち、ちゃんとメアド交換した？」

裕理の問いに私は「じゃーん」と携帯を見せびらかした。

そこにはセナ君ことれいちゃんの名前で入力した携帯とメールアドレスが表示されている。

「昨日早速メール貰ったんだ。また遊ぼうって」

「へえ、いい感じじゃない。それで、杏菜はどんな返事したの？」

「えつとね。それは…」

きりちゃんの問いかけに答えようとして、私は答えに詰まった。

「「こら杏菜、勿体ぶらないの。で、どんな返事したの？」」

木崎姉妹がコラボって聞いてくる。

けど、けど…、私は自分の送ったメールの内容が答えられない。

だって、よくよく考えてみたら、

「まさか、王子に返事してないなんてことないよね」

みんなの視線が痛い、そんなに睨まないでー！

「ごめんなさい！セナ君にメールするの、すっかり忘れてましたー！！」

私は突如鳴り響いた自分の声で、ぱちつと目を開けた。

目を擦ってみても、そこには私を睨むレンも裕理もきりちゃんも姉妹も、誰もいない。

それもそのはず。だってここ、学校じゃなくて私の部屋だから。

「って、あれ……。そっか夢、か」

実は夢の続きでは土下座しそうな勢いだったけど、さすがに寝起き直後にそんな動きできる程私の運動神経はよろしくないの、布団の中でつんのめった体勢でどうにかストップ。

もそもそと起き上がって目覚まし時計をOFF。

すると視線は自然に横に置いてあった携帯にいくわけで、夢で気付いた現実がどーんと押し寄せてくる。

「どうしょ。メール…」

TVの中からおばあちゃん登場！

に度肝を抜かれて、携帯の存在ごと忘れて、いるかいなかもわからない『いとこ』妄想でにやついてました！
なんて言い訳にならないよ。

貴重な貴重な静電気が出ない男の子（＝運命の王子様？）からのメール（それも二通とも）を無視しちゃうなんて、私最低だ。

最悪だ。

JK失格だ〜！

こんなだからきつと今まで彼氏できなかったんだ〜！！
大ボカに悶えながらも、とりあえず受信を知らせてチカチカ点滅している携帯をぱかっと開いた。

昨日の夕食以降、存在を忘れきっていた携帯には何件かメールが溜まっていた。

コンパの感想やアリバイ工作の是非を気にする裕理に、きりちゃんや木崎姉妹からもメールが来てる。

メアド消去済みの桜庭君達のメールは悪いけど後回しで、私の目は『れいちゃん』からの未開封メールの上で止まった。

一通目のメールの返事がまだなのに、セナ君は二通目もくれたんだ。

題 門限セーフ

本文 そういえばいっちゃんって年下はアリ？

一通目と同じ、飾りつけなしのメール。

（セナ君なら、全然ありだよ〜）

心の中で、返事した。

だって王子顔だよ。背だって私みたいなチビじゃないし、瑛明だし、エリートだし。

さすがにセナ君が中学生となるとちよつと考えちゃうけど、高校生同士なら男の子が年下でもありだと思う。

きりちゃんの彼だって学年一つ下だし。裕理だって今彼の悟君は同

級生だけど、過去には年下と付き合ってたことがあった。

だから今問題になるのは、

「メール二通とも返事してないって、これって完っっ全に無視した
ことにならない？」

鏡に映る寝起きの顔は、寝癖が加わって間抜けさ倍増だった。

裕理やきりちゃんからのメールはともかく、まずはセナ君に返事するのが最優先。

迷って悩んで考えて、最初に打ち出した一行は、

お返事遅くなってごめんなさい！

うーん……、出だしから謝るってのも変かなあ。

堍菜です。昨日は楽しかったです

なら昨日のうちにメールしろよって感じがしら。

あつ、タイトル Re: のままで返すのもマイナスかも。

とまあ、文字を打っては消しての繰り返しで、送信ボタンがなかなか押せない。

「堍菜起きてるの？早くご飯にしなさい。遅刻するわよー」

一階からママが私を呼ぶ声が聞こえる。

結局セナ君へのメールはまとまらず、私は寝癖と格闘した後慌ただしく制服を着て、階段をばたばたと駆け下りた。

「おはよう」

牛乳をコップに注ぎながら、私はママに声をかけた。

「おはよう、堍菜。あなた朝方何か叫んでなかった？」

どきーん！あつ、牛乳こぼしちゃった。

「えっ、ママにも聞こえてた？あは、あはは。変な夢見ちゃって…」

「そう？ならいいけど」

トーストの載ったお皿を渡すママの目線がなんか痛い。

（セナ君の名前、聞かれてないよね？）

別の話題にそらしたい私は、TVのリモコンに手をのばした。

「今はTVはやめてちょうだい。頭痛がするのよ」

おばあちゃんのことはまだ尾を引いてるのが、ママは朝からピリピリしてる。

ただでさえ不機嫌なのに、昨日コンパに行った事がばれたら大変だ

ろくな。

余計な事口走らないようにしなきゃ。触らぬ神に祟りなし、よね。
イチゴジャムをたっぷり塗ったトーストをちゃっちゃんと口に詰め込んで、牛乳で流し込んで、

「ごちそうさま！」

「ちょっと待ちなさい、野菜」

早々と朝食を終え、席を立った私をママが呼び止めた。

ママの表情はあいかわらず険しい。もう年なんだから、そんな顔ばっかしているとシワになっちゃうよ。

「な、な、何？」

（寝言の事つつこまれたらどうしよう）

母親相手なのに、刑事尋問の如く妙に緊張してしまう私。

「お母さん、いいえあなたにとってはおばあちゃんの事だけ……」

（ふう、寝言の方じゃなくてよかった）

心の声は心に残ったままで、私はママの次の言葉を待つ。

「昨日のニュース、あなたの友達も見てるかもしれない。でもあの
人と血縁だってこと、絶対に他言しちゃだめよ」

「え？でも犯罪者でもないのに……」

「そういう理屈じゃないの。とにかく絶対に駄目！いい？」

ママの気迫に押されて、私はこくりとうなづいた。

この時の私はママがおばあちゃんの事を隠す理由がおばあちゃん
が家族を捨てた過去や男性遍歴、

そして現在はセレブである事を周りに騒がれたくないからだと思っ
てた。

勿論、それも間違いではないのだけれど、ママが懸念してた事態は
残念ながら間もなく現実を訪れることとなる。

「『エーゲの暁』は孫娘に譲りたいと思っていますの」

おばあちゃんの思いつき発言のせいで、とんでもない騒動に巻き込

まれる羽目になるなんて、今の私は想像すらしていなかった。

結局セナ君へのメールは打てずじまいで家を出て、いつものバスに乗るべくバス停にたどり着いた私。

（バスが来るまでまだ時間あるし、今メのうちにメール打てないかな？バス混んでるかもしれないし）

鞆の中から携帯のストラップを引っ張り出した。

（今更メールしたって、セナ君はもう返事待ってないかも）

通りの向こうを眺めて、バスが来る気配がないのをもう一度確認してから、アドレス帳を呼び出した。

（えーっと、ら、り、る、）

『れいちゃん』の呼び出して、メール作成ボタンをぶちつと押す。けれど、新規メール画面に切り替わった途端、画面が凍り付いた。

<充電して下さい>

そういえば昨日の時点で電池半分切ってたかも。なんで寝る前に充電しないの、私！

（私の大バカー！！）

心の叫びをバックミュージックに、今日もたくさんの乗客を載せた浮草駅行きバスがやってきた。

はあー。

遅刻とは無縁の時間に登校したはいいいけれど、一限目の古典の予習をする気にもなれず、私は携帯を見てはため息をつく。

目の前が突然暗くなったので、見上げるとにやにやした裕理が立っていた。

「おはよー、いち」

「おはよ、裕理」

はあー。ため息をもう一つ。

裕理は鞆を置くと椅子を引いて、私の隣の席に腰掛けた。

中等部の頃から常に成長期の裕理は、すすく縦に育っていまや170?オーバー。

立つても大きいけど、座つてても座高が高い。

（確かセナ君もこれ位の身長だったよね）

はあー。ため息を更に一つ。

（セナ君はメール無視する女なんて、問題外だよね）

「いち、さつきからため息ばかり。もう恋煩い始まったの?きりから聞いたよ。昨日、会えたんでしょ?『王子』と」

「王子……、セナ君……、メール」

私はずさーっと机に突っ伏した。

「メールがどうしたの?」

「わざとじゃないの。ちよつと家がゴタゴタしてて、それで」

「それで?」

「メール貰ったのに、返事、できてないの」

「「ええー!!しよっぱなからメール無視い?ありえない」」

裕理よりも先に突っ込んだきたのは木崎姉妹。

おはようの挨拶もそこそこに、二人とも机にどかつと鞆を置くとでーんと我が物顔で椅子に座る。

あれ、まゆりはともかくいるみはクラス違つたよね。

いるみに席を取られて本来の席の主、有村ちゃんが座れず困つてますよ。

そんなことお構い無しで双子のマシンガントークが始まった。

「彼、瀬名君だっけ、あの子絶対壱菜のコト気に入つてたよ」

「しかも瑛明のホワイトカラー。壱菜、これは遊ばれてもいいから行つとくべきだつて!」

「そうぞ。人生経験あるのみ!それをメールごとシカトだなんて勿体ない!バチが当たるよ」

「女は度胸!一度位年下に弄ばれたって損はしないよ?」

弁解の余地も挟まず交互に双子がまくしたてる。とそこに、

「ねえねえ、裕理ちゃん達の話、ひょっとして『瀬名兄弟』の事じゃない？」

席を盗られながらもいるみを怒らず温かく見守っていた（？）被害者、有村ちゃんが私たちの会話に入って来た。

「ありつち、知ってるの？ってか瀬名『兄弟』って？」

私がひっかつた所に、裕理も疑問を抱いたようだ。

「兄弟ってどういうこと？まさかセナ君も双子なの？」

有村ちゃんは「違うかもだけど」と前置きしてから言葉を続ける。

「瑛明でホワイトカラーで瀬名って言ったら瀬名兄弟かなーって思っ
て。長男は良く知らないけど、次男はうちの兄貴と同級だったの。
三男はうちの二年後輩。私、瀬名兄弟と小中と学区が一緒だった
から。三人ともホワイトカラーの秀才で、おまけに顔がいいから有
名だったよ」

「へえ、セナ君でお兄さんいるんだ。ちょっと見てみたいかも」

いるみが興味を示している。一方まゆりは「そう？」とどうでも良
さげ。

腕を組んで考え込んでいた裕理が突然「思い出した！」と叫んだ。

「そっいえば、悟から聞いた事あったかも。瑛明には『伝説の三兄
弟』がいるって」

「伝説の三兄弟？何その安易なネーミング」

裕理の発言にいるみがすかさず突っ込む。

「だってそう聞いたんだもん。兄弟三人揃ってホワイトカラーで、
ルックスが良くて頭も良い。けどモテる分女癖が超悪い、伝説の三
兄弟がいるって」

顔よし！頭よし！！でもって女癖悪し！！！！

さーてみなさん、突っ込みどころはどこでしょう？

「女癖が…、悪いだとお？」

声のした方向を見れば、教室の入り口に鬼の形相をしたきりちゃん
が立っていた。

「あれ、きり。わざわざB組までどうしたの？」

きりちゃんの所属する3・Sの教室は他の3年の教室とはフロアが異なり、私たちのクラスまでは結構な移動距離がある。

「どうもこうもないわよ！」

ずかずかと教室内に侵入し、きりちゃんは有村ちゃんや裕理をおしのけ私の正面にどーんと仁王立ち。

心無しかきりちゃんの色素の薄い瞳がメラメラと萌えている、じゃなかった、燃えているような。

「莚菜、やっぱりのセナって子はダメ！うぶなあんたには早すぎるわー！」

「えっ、今既に彼氏いない暦17年なんですけど。早すぎるどころか遅いんじゃない？」

「せっかくだから応援しようかと思ってたけどやっぱ駄目！莚菜の初めてはもつとキレイな子じゃないと」

「えーっ、セナ君なら十分綺麗な顔してると思うけど。年下とはいえ、静電気も出ないし、莚菜の事気に入ったみたいだし、あれより上狙うんじゃない、莚菜一生彼氏できないよ？」

まゆりのつつこみに私も同意。こくこくと頷いた。

だってセナ君に女装させたら絶対私より美人になるよ？

「顔じゃない！心の話よ！！」

「そんなに悪い子には見えなかったけど…」

私は恐る恐る反論してみた。

「確か中学じゃ生徒会長とかしてたって聞くし、まあまあ人望はあるんじゃないかな」

まずい話を振ったかもしれないと気をつかってか、有村ちゃんもフオローしてくれている。

「けど女には節操がないんでしょう？怪しいと思ったのよ。初対面の莚菜に馴れ馴れしく優しくして」

うーん、きりちゃんってばうちのママみたい。怖いよ。

「それは噂かもしれないし、悟の勘違いって可能性も…」

裕理もきりちゃんをなだめようとしてくれている。

「でもさあ」

机に肘をついたいるみが気怠気に声を出した。

「売菜はメール無視しちゃってるわけでしょ？霧霞がどうこう心配したところで、当の売菜がノーリアクションなんだから、意味ないんじゃない？」

しーん。全員沈黙。

「それもそうね……。いい？売菜、安易な返事しちゃ駄目よ。は？携帯が電池切れ？馬鹿ねえ。私充電器持ってるから、昼休みにでも取りにきなさい」

言うだけ言って、きりちゃんはS組へと帰っていった。その手には裕理の生物の教科書が握られていた。

きりちゃんは生物の教科書忘れちゃったんだって。

それで教科書はロッカーに入れっ放し派の裕理を頼って、B組に来てたみたい。

きりちゃんの去った後、ようやく自分の席に落ち着いた有村ちゃんが私に話しかける。

「田所さんってパワフルだね。私話した事無かったからびっくり。

ハーフだし、もっとおとなしい子かと思ってた」

「きりちゃんは見た目と中身が一致しないんだよね」

「そういえば売菜ちゃん、瀬名君とは何で知り合ったの？」

「あつと、それは、裕理がコンパ組んでくれたの」

有村ちゃんは「そうだったんだ」と納得し、一限目の古典の教科書を机に置いた。

「ねえ有村ちゃん。さっきの話は本当？あの、その、瀬名兄弟は女癖がつてやつ」

どぎまぎしながら私は一番気になる事を聞いて見た。

「えーっ、同中って言っても学年違うし。最近の話まではちょっと

…」

そっだよね。瀬名君は二歳下なんだから、有村ちゃんが知ってるのは中一の頃の瀬名君だ。

流石に中一の頃から既にカノジョとつかえひつかえしてましたって言われても嫌だな。

「確か瑛明の一年に弟いる友達がいるけど、今度聞いてみようか？」

「あ、そこまでしなくても……」

ほんと頼もつかと思っただけど、悟君経由で裕理が追加情報を仕入れてくる可能性もあるし、今は保留かな。

伝説の三兄弟 2 / 3

午前の授業は古典 音楽 体育と移動が多くてあつと言う間に昼休み。

「堯菜、霧霞のどこ行くの？」

「うーん。S組遠いから面倒いんだけど、きりちゃん待ってるかもだし」

多分B組にも充電器を持つてる子がいると思うんだけど、聞いて回るのもめんどくさいしね。

お弁当の蓋を閉じると、私は3・Sを目指すことにした。

十六夜学園高等部は基本1年が5階、2年が4階、3年が3階に教室があるんだけど、

3年にだけある特別進学クラスのS組は2階に教室がある。

以前レンに「階段少ないから楽でしょ」って言ったら、「2階はトイレ少ないし遠いから不便だよ」って返されたっけ。

てくてくと階段を降りていた私は、てくてくと階段を昇ってくる女生徒とすれ違いざまに顔を見た。

「あれ、レン？」

噂をすれば影？それは小等部からの親友、とみおかれん富岡恋だった。

レンは驚いた顔で振り返る。

「堯菜じゃない。久しぶり。西階段使ってるなんて珍しいわね、ひよつとしてうちのクラスに用だった？」

ちなみに3・Bの教室は東階段が近くて便利だから、西階段は滅多に使わなかったり。

「うん。きりちゃんに借り物しに」

私達はお互い階段の踊り場部分まで戻った。

（最近レンと会ってなかったし、セナ君の事とか色々話したいな）
私はそう思ったんだけど、レンはなんだかそわそわしてて落ち着か

ない感じ。

「レンは3階に用事？」

「えっ？その…、ちよっと6階に、呼ばれてて」

十六夜学園高等部では教官室は2階だけど、理事長室や校長室、来賓室と言った偉い人達の部屋は6階にある。

（ちなみに校舎は生徒使用禁止の教職員専用のエレベーター完備です！）

「6階？……まさかレン、何か悪い事して呼び出しじゃ？」

「ま、まさかあ！そ、そんな訳ないじゃない」

「そっか。レンは違反嫌いだもんね」

「う、うん……」

なんだか歯切れ悪いなあ、今日のレン。叩けば埃が出てきそう。昨日の車の人の件もあるしね。

けどまあ、今日の所は許してあげますか。

「ふうん。じゃあ、また今度ゆっくり話そうね」

「うん。また連絡する」

レンはほっとした顔を見せると、「じゃあね」と手を振ってぱたぱた階段を昇って行った。

やってきました3-S。私は入り口から栗色の髪の子を探す。S組は高等部から入って来た生徒が多くて知り合い少ないから、AWAYな感じ。

「きりちゃん！」

声をかけると読んでいた参考書をぱたんと閉じて、きりちゃんがこっちにやってきた。

「売菜、ちゃんと来たのねー、偉い偉い。はいこれ、充電器」

手渡されたのは黒いコードの充電器＋生物の教科書。

「あれ、きりちゃんこっちは？」

「ついでに裕理に返しといってくれる？充電器は明日でいいわよ。これ予備だから」

「むー、きりちゃん。私のこと密かにパシってない？」

「あはっ、ばれた〜？」

「もうー！」

ぽかぽかときりちゃんの胸を叩いた。

叩く度にぽよんぽよんはずむ巨乳、私にはないものね。これもオフランスの血のせいかしら。

「そういえばさつきレンに会ったよ。なんかそわそわしてたけど」

「ああ、理事長に呼び出されたみたい。珍しい呼び出しよね」

「へえ〜。入学式と卒業式の時しか顔を出さない理事長が呼び出し！珍しいね」

なにせ十六夜学園は小等部から大学まで揃ってるから、理事長は結構多忙みたい。

「そういえばきりちゃん、レンに昨日の車の人の事聞いたの？」

「もちろん聞いたわよ。『昨日の車の人は誰？』って。そしたら『何の事？人違いじゃない？』ってすつとぼけるのよ」

「あれは絶対レンだったよね。なんで誤魔化すんだろ？」

さつきの階段での態度も引つかかる。やっぱりレンがヘンだ。

「でしょ？そのうち絶対あばいてやる〜」

ぷりぷりしているきりちゃんに充電器の礼を言って、私は自分の教室に帰った。

さてさて、本日最後の授業は日本史。

3・Bの日本史担当は東野先生なんだけど、先月末から病氣療養中で復帰時期は未定。

必然的に授業は自習！進学校ならOUTよね。

社会科繋がりで現れた川崎先生が出欠をとって、自習用のプリントを配り始めた。

「それじゃあ終わったらプリントを集めて社会科準備室に持って来てくれ」

「せんせー、誰が集めるんですか？」

最前列の小林さんがのんきに川崎先生に尋ねた。

（こういうのって大抵言い出しつpeg押し付けられるよね）

って私は踏んでただけど、川崎先生は3・Bの名簿を開いて考えてる。

「よし！荒谷に頼もう」

「ええーっ！なんで私？」

てつきり小林さんが頼まれると思ってたのに。

「答えは簡単だ。荒谷壱菜、お前が3・Bの出席番号1番だからだ
〜！」

クラスのアッチこつちでくすくすと笑い声が。

「いち、諦めな。『あ』行の運命だって」

と冷やかす裕理に、

「壱菜ちゃんがいてラッキー。私去年までは絶対一番だったから
こちら是有村ちゃん。

（『あ』で始まる名字の皆さんは、多分こういう貧乏くじひいたこ
とが何度かあるはず）

「川崎先生、せめて日直に頼むとかもうちょっと捻って下さいよー」
私がぶーぶー文句を言ってる隙にも、川崎先生はさっさと帰ろうと
している。

「わかったわかった。今度は渡辺に頼むから。それじゃ私は行くぞ。
生徒を待たせてるんでな」

と適当な台詞を残して、川崎先生は自分の受け持ちの二年のクラス
に戻ってしまった。

とほほな気分で課題を始める私。

「壱菜ちゃん、集めるの手伝ってあげるよ」

「ありがと、有村ちゃん」

さすが『あ』行仲間。優しいわ。

キンコンカンコンコン。

一日の授業の終わりを告げるチャイムが鳴た。

帰りたいのはやまやまだけど、今日の私にはもう一仕事あるわけで、やってきました社会科準備室。

コンコン？

「失礼しまーす」

「どうぞー」

室内から返って来た声は私に用事を押し付けた川崎先生のものではない、男の人の声だった。

（あれ、社会科でこんな声の男の先生いたっけ？）

川崎先生は喋り方はとっても漢らしいけど性別『女』だし、安田先生はおじいちゃんだからもつとよぼよぼの声だし。

（誰か別の科目の先生が来てるのかな？）

中を覗けば四つ並んだ教官机の一番奥、ぶっちゃけ私がプリントを届けに来た川崎先生の机に誰か男の人が座っていた。

（えーっと、あの後ろ姿って……誰だっけ？）

扉を後ろ手で閉めながら、私は首を傾げる。

パーティーションが邪魔でここからだと思中しか見えないけど、すらっとした細身のはげてない先生。

（うちにこんな先生いたっけ？）

女子校だからって理由もあるだろうけど、十六夜学園高等部の教師の男女比は2：8。

しかも男性教諭はアラフィフが多いから、大体ハゲかメタボのオジサン先生ばかりだ。

（まさか、変質者とかじゃないよね…）

私の頭をよぎったのは年に一回は必ずある不審者騒ぎ。

十六夜学園はお嬢様女子校のネームバリューがある故にターゲットとして狙われやすいのか、

去年は白昼堂々と運動場を撮影していた男が捕まったり、今年は父兄を装って更衣室に忍び込もうとした男が捕まったり。

（ま、まさかね。でも、こんな先生はいなかったはず）

カチカチとキーボードを叩く音が聞こえる。パソコンをいじってるのかな？

「誰か先生に用事？伝言なら伝えとくけど」

男の人は私に背を向けたまま、声だけかけてきた。

（どうしてこつちを見ないの？あやしい。ますますあやしい…）

いざとなったら大声で叫んでダッシュで逃げよう！

と身構えている私に対し、男の人は追い打ちとなる言葉を投げかける。

「今、ここの先生達みんな出払ってるけど。君、誰に用なの？」

ん？先生達が一人もないってことは……、私は今準備室でこの不審者（仮）と二人つきりなわけで、

「えっと、その……」

にじりにじりと後退する私。けど、不審者（仮）がゆっくりとこちらを振り返る。

これってかなりピンチ？？

ガラガラ？

私の救いを求める（心の）声に呼応するかのように突如開かれた扉。そこにいたのは私を呼び出した当本人、川崎先生がお菓子の箱を片手に立っていた。

「ああ、荒谷か、待たせてすまん。ちょっくら職印室に茶菓子をとりに行つててな。一枚食うか？」

「川崎先生！」

私は思わず川崎先生の腕に縋り付いてしまった。

「どうした？そんな怯えた顔をして。怖いものでも見たのか？昼間っから幽霊は出んぞ」

川崎先生は私が怯えている理由がわからず、きょとんとしている。

「せ、先生の机に、し、し、知らない男が、ふ、ふ、不審者が！」

男を興奮させないようにできるだけ声のトーンを下げて、私は川崎先生に告げた。

川崎先生を？んだまま、私の腕はがくと震えている。それを見た川崎先生の目つきが変わった。

きよろきよろと準備室を見渡し、先生は、

「で、その不審者はどこにいるんだ？」

とがっかりな答えを返してきた。

「せ、先生！見えないんですか？先生の机に座ってるじゃないですか、不審な男が！」

「はあっ？不審な男って俺の事？」

しまった！声が大きくて思いっきり不審者（仮）に聞こえちゃった。がたんと立ち上がる音がして、つかつかと大きな足音で不審者（仮）が私たちのところに歩いてくる！

「ひいひい〜！」

情けない声をあげて、私は川崎先生にしがみついた。

か弱い女二人、大の男に腕力で敵うわけないし、絶対絶命の大ピンチ！！

（うーん、殺される〜。拉致られる〜！）

縮み上がった私の頭を、

ぽんぽん？

と不審者（仮）が軽いタッチで叩いた。

（……、あれ？）

不思議と体中に入っていた力がすうつと抜けて行く。

「川崎先輩、この子俺の事を不審人物だって勘違いしてるみたいなんですけど」

「荒谷が言ってたのはお前の事だったのか。まあ、よく考えれば女子高に知らない男がいたら、不審者と思っても仕方ないな」

「仕方ないじゃなくって、先輩、なんかフォロー入れて下さいよ」

私を挟んだ頭の上で川崎先生と不審者（仮）がなんだか普通に会話してる？あれ、不審者じゃなかったの？

「こつという誤解を解く為にもはつきりしといた方がいいんじゃない？」

「とは言っても、生徒が知らん事を理事長をさしおいて私がばらすのもな」

そう言つて川崎先生は私の肩を持つと、くるんと回れ右させた。

目の前に立つ男の人は、なんだか太いフレームのだっさい眼鏡とマスクをしている。

それでもってブランドものっぽいスーツを着てるから、なんか違和感。

（やっぱり不審なんですけど）

本人に向かつてそう言いたい気持ちるぐつと押さえて、私は川崎先生に目で訴える。

「荒谷、これは私の天竜大時代の後輩でな。うちの教授はこの理事長と仲が良くて、こいつはパシリに出されたんだ。でもってPCの調子が悪いからついでにここに寄ってもらった訳だ」

「そう、だつたんですか……」

「こいつに茶菓子でも出そうと思つて席を離れたんだが、そのせいで怖がらせてすまなかつたな、荒谷」

つまりは完全な私の勘違い。ひゃー、顔から火が出そうに恥ずかしい！

「すつ、すみません！私、早とちりして」

不審者扱いしてしまつたにも関わらず、後輩の男の人は眼鏡の奥でこつと笑う。

「俺が不審者じゃないつてわかつてもらえたならいいよ。吉菜ちゃん」

落ち着いて見れば身長もそこそこあるし、鼻筋整つてるし、眼鏡とマスクがなければ結構カッコいい人なのかもしれない。

（あれ、この人の顔、どこかで見た気が……）

ひっかかりを覚えたのも束の間。川崎先生が、

「荒谷、自習課題を貰おうか」

と声をかけたので私は集めたプリントを手渡して、お使い（？）のご褒美にクッキーを一枚頂いて、

これにて一件落着！となっていました。

教室に戻ろうと歩き出した私は、廊下の角を曲がったところでふつと足を止めた。

「あれ、あの人さつき私の名前呼んでなかった？」

川崎先生は私を「荒谷」と名字でしか呼んでなかったのに。「壹菜ちゃん」と呼ばれた気が。

「気のせいかな？ま、いつか」

深く考えない事にして、私は再び歩き始めた。

伝説の三兄弟 2 / 3 (後書き)

序盤は登場人物の関係性が不透明な状態で話が進みます。

現時点では作者の自己満足の状態ですみません。

早く「なるほど」と思われる展開になるよう、遅筆ですが頑張ります！

伝説の三兄弟 3 / 3

無人状態の3-Bに戻って来た私は、教室後方のコンセントから充電器を外した。

せっかく昼休みに充電器借りてきたのに昼休みは他の子がやっぱり充電でコンセント使ってたから、

私が使えたのは結局日本史の前からだっただよね。

（これなら家に帰ってから充電するのと大して変わらなかったかも）
とほほな気分で電源ボタンを押すと、暗かった液晶に光が灯る。と同時に

ブルルル、ブルルル、

いきなりバイブが振動！

急に着信すると思ってたから、ちょっとびっくり。

（あれ、レンからだ）

新着メールをクリックすると、

題 さつきは

本文 あんまり話せなくてごめん。

堯菜に伝えときたいことがあるんだ。

夜電話していい？

（レン、気にしてくれてたんだ）

きりちゃん程じゃないけど私もこのところのレンに「？」と疑問を抱いていたから、レンが自分から打ち明けてくれそうでは安心してた。

（良かった、まだ友達だよね。私たち）

返信ボタンを押すと、一気にボタンを押す。

題 もちろん

本分 待ってるね。

私もね、レンに相談したい事があるの。

送信ボタンまで押して、すっきりしたところで私は朝から宙ぶらりんになってたもう一通のメールの作成にとりかかる。

宛先はもちろん瀬名君。

朝、裕理から聞いた『瀬名三兄弟』の女癖の話は正直少しへこんだ。そりゃ、あんなかつこいい男の子が今まで彼女いなかったって言われる方が嘘っぽいけど、遊んでるっていうのは……、うーん。

けど、私には瀬名君がそんな悪い子に思えなかったんだ。

男でも女でも顔よし頭よしで何でも揃ってる人なら僻みやつかみだって言われるはずだし、

瀬名君も先輩達に悪く言われているだけかもしれないでしょ？

（別に、顔が好みだから庇ってるってわけじゃないからね！）

木崎姉妹の受け売りじゃないけど、人生経験あるのみ！

当たって砕けたっていいじゃない。

だって『誰か』に言われたんじゃないかって『私が』もう一度会いたいて思ってるんだから。

さて、舞台は一旦社会科準備室に戻る。

十六夜学園の社会科教師陣の一人、川崎由佳は不思議そうに掌を見ている天竜大学時代の後輩に声をかけた。

「ん、どうした？さつきからじっと手をみて」

「さつきの子の頭触った時、ちくつと痛かった気がして」

「ああ。それはきつと静電気だろう」

川崎がさらっと放った言葉に、青年は首をかしげる。

「静電気？冬でもないのに？」

窓際に移動した青年は、空を見上げ、十数分前の記憶をたぐり寄せ

る。

「そういえば、ぱちぱち鳴ってた…ような」

「ラッキーだったな。普通ならちよつと触っただけで飛び上がる位痛いらしいぞ。私は女だからくらったつことはないが」

「へ？どういう事ですか、それ」

川崎はにやりと笑みを浮かべる。

「3・Bの荒谷壱菜は異性に触れると自分の意思に関係なく相手に放電する特異体質なんだ。まあ一種の男性アレルギーだな」

「はあ？異性に放電するアレルギー？？」

「おもしろいだろう。うちの教師も何人か身をもつて経験済みだ」

川崎は一、二、三、と校内の被害者数を指おり数える。

「そうそう。これはまだ内定事項だが、お前の受け持ちクラスに、3・Bもばつちり入ってるぞ」

「……、はあ。そうですか」

青年は厄介事が増えたと言わんばかりに大きなため息をつく。

「まあ、お前が教師に向いてるかどうかはわからんが、とにかくここは女子高だからな。マダムキラーの名はそろそろ返上して、たまには年下の女に囲まれて苦労してみる。お前のルックスだと生徒が騒いで大変だろうな」

「だーからー、俺はたまたま好みの女が年上に多かっただけで、別に熟女好きでもマダムキラーでもないって何度言えば」

「ほう、今度はロリコンに宗旨替えか？OB会でネタになるな」

「川崎先輩、そういう話じゃ…全く、もう」

反論を諦めた青年がやれやれと首をふる。

窓から差し込む西日を受けて、青年の黒髪が一瞬鋼色に鈍く輝いた。
「だから女子高の臨時教員なんて引き受けるの嫌だったんだ。いくら教授の頼みだからって…」

ぼやきに近い青年の呟きに川崎は、

「これも経験だ。頑張れよ、瀬名力ジ。いや、早速『瀬名先生』と呼ぼうか？」

エールの意味を込めてばしつと青年の背を叩いた。

瀬名カジと呼ばれた青年はけけけ咳き込みながらずれた眼鏡をはずす。

「しかし今日はどうしたんだ？そんな古くさい眼鏡にマスクまでつけて。ストーカーにでも追われて変装でもしてるのか？」

先程壱菜は変質者と勘違いしたが、

普段の瀬名カジを知る川崎からすれば、彼はどちらかといえばストークする側ではなくされる側という印象だ。

「目が痛くてコンタクト入らなかったんですよ。メインの眼鏡が見当たらず、こっちは予備。あとマスクは……」

マスクをはずすと、顎のあたりに隠れていた青痣が嫌でも目に入る。「なんだそれは？平沢教授が見たら泣くぞ。教授はお前の綺麗な顔が大好きなんだからな」

「先輩、その言い方セクハラですよ」

ちなみに川崎と瀬名カジの恩師、平沢教授は妻子持ちのロマンスグレーの紳士である。

「昔みたいにとっかの人妻に間男したのがばれて、旦那に殴られたのか？」

「先輩、有りもしない過去を捏造しないで下さい。そもそも殴ったのは男じゃないし」

「ははっ、ということはやっぱ女がらみなんだな」

ふてくされた顔で瀬名カジは曇ったレンズを吹こうと眼鏡を外す。年齢や体格は違えど、その素顔は瀬名零斗と瓜二つであった。

その事を壱菜が知るのとはそう遠くない未来のこと。ていうか割とすぐやってくる。

そして舞台は一時し県浮草市を離れ、日本の首都、東京に移る。時計の針は壱菜が体育の授業を受けている頃まで巻き戻そう。

都内S区某所のマンションの一室。

携帯の着信音に顔をしかめて男が布団から手を伸ばした。

自分で設定しときながらも寝起きに聞くと妙に不快な着信メロディ
―は延々と鳴り続けるのに、

肝心の携帯はどうやら脱ぎ散らかした服の下に隠れているようで、
中々見つからない。

隣で眠る女も「うるさいよ」と文句を言う。

男は寝起きの頭で、

（今日は絶対、ゼミもバイトもなかったはず）

と確信し、音が切れるまで放置しようかと思っただが、彼よりも電話
をかけてきた相手の方が忍耐強かった。

しかも、こういう時に限って携帯は留守録設定になっていない。

「摂、これ誰？女？」

すっかり目が覚めてしまったらしい女が昨日脱がされた己の下着の
下から男の携帯を発見し、男に突き出した。

着信表示は中山。男の大学の同級生で、れっきとした男だ。

男は目を擦りながら通話ボタンを押す。

「もひもひ？」

「瀬名。お前やつぱり寝てたな。とつとと起きろ、大変だ！」

欠伸をかみ殺した寝起きの第一声は間抜けなもので、布団に体を隠
しながらもそもそと下着を付け始めた女はくすりと笑ったが、

生憎中山の方は笑っていられる状況じゃなかったらしい。

「はあ？なんだよ？」

男は寝癖のついた明るい茶髪をぼりぼりと掻く。

「いいからとつととTVつけろ！ネットでもいいから」

「なんだ？大学で通り魔事件でもあったのかよ…」

上半身は裸のまま、通話中の携帯を横に置いて男はノートパソコン
を開いた。

一方女は下着だけでなく、服も着ようとしている。

「帰るの？」

「たまには家帰つとかないと。親うるさいし」

男がそうであるように、女も今日はオフだと言ってなかったか。

（もう一回位、楽しんどこうよ）

男は片手で女を抱き寄せた。

スカートに足を通してしている途中だった女は、体勢を崩してあっけなく男の腕におさまった。

「ちよつと撰！」

腕の中で女が文句を言っているが、手の拘束はほどかず、昨晚楽しんだ肌の感触を再び掌で感じながら、空いた手でマウスを動かす。

「あんつ、どこ触ってるのよ」

女の声が聞こえたのか、通話口から中山の罵声が響く。

「なにふざけてるんだ！瀬名、会社が潰れたんだぞ！」

折しもそのタイミングで画面に表示されたニュースサイトには新着ニュースには、男が良く知る会社の名前が載っていた。

そして社名に続く『倒産』の漢字二文字は、中山と同じくその会社に就職が内定している男を奈落の底に突き落とすものだった。

「……は？」

ブラジャーの下にもぐりこんでいた男の手がするりと抜けた。

「嘘、だろ」

ブックマークにある別のニュースサイトをいくつか開いても、多少表現が違っただけで皆一様に同じ内容を書いている。

『負債総額』、『業績不振』、『経営破綻』、もしこれが数ヶ月前の出来事なら男にはまだ別の選択肢があった。

けれども男は既を選んでしまった後だったのだ。

「撰^{せつじ}尔、どうしたの？」

下着姿で放置されて肌寒くなったのか、女が温もりを求めて男に抱きつく。

男は携帯を耳に当てた。

「中山、これ、『冗談だよな？』」

「俺もそう思いたいよ。けど、会社は潰れたんだ。内定取り消しに決まってる。くそっこんな時期に…一からやり直しかよ!」

電話の向こうの中山の声は怒りで、悔しさで、震えていた。

「ねえ、撰」

事態を把握してないのか、甘ったるい声を出して女が腕に胸を押し付けてくる。

「……帰れ」

「は？」

「いいからお前、帰れ。でもって二度とここに来るな」

男は無言で女の服を？み、投げつけた。

「いきなり何よ。アンタ最低ね!」

文句を言われながらも女を無理矢理部屋から叩き出した男は、さんさんと輝く太陽をガラス越しに見つつ、夢であればいいのにと頬を抓った。

「痛えよ……」

クローゼットには役目を終えたはずのリクルートスーツ。

テーブルには中山ら悪友達と行く予定だった海外旅行のパンフ。

「どうするよ、俺」

世の学生が就職難に喘ぐ今日、寝て起きたら内定先を失った不幸な男、瀬名撰尔。

彼が莚菜と対面する日もそう遠くない未来のこと。

というか割とすぐやってくる。

最後に、時の針をもう一度放課後まで進めて、舞台は十六夜学園に戻って来る。

瀬名君にようやくメールを送って、後は帰るだけの私は下駄箱で靴を履き替える。

（社会科準備室に寄ったせいで、今日は遅くなっちゃったな）

今日は急ぐ用事もないし、のんびりバス停に向かって歩き始める。

「ねえ見てあの子、彼女と待ち合わせかな？あんな目立つところで
勇気ある〜」

「あれって瑛明かな？シャツの色が違う気が…」

「知らないの？あれが瑛明のホワイトカラーよ」

私の少し前を歩く女の子達の話し声が聞こえた。

（ふうん、瑛明のホワイトカラーがお迎えかぁ。誰の彼氏だろ？）

一瞬、瀬名君が自分を迎えに来て鼻高々で帰る所を妄想してしまいました、私。

噂の男の子を確かめようと目を凝らした私は、十六夜学園高等部の校門にもたれかかって立っている身長約170?のシルエット（裕理じゃないわよ）を捉えた。

それはまさに、

「せ、瀬名君？」

ついさっきメールを送ったれいちゃんこと瀬名零斗、その人だったのだ。

伝説の三兄弟 3 / 3 (後書き)

瀬名三兄弟は上からカジ、摂尔^{せつじ}、零斗^{れいと}と言います。

それぞれ温度表記の華氏、摂氏、零度からもじってたりします。

これから巻菜とどう絡むのかお楽しみに！

次回はサブタイトル『祖母、来襲』の予定です。

相変わらずの不定期更新ですが、今後も『いとこひ』をよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7044o/>

いとこひ

2011年1月30日09時21分発行